☆ 帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義の武装反革命を粉砕し、世界革命戦争―世界プロ独を組織する世界単一党を国際階級闘争の最前線に組織せよ！

6月5日
（毎月5.20日発行）
第275号
編集発行人 高木一夫
一部 50円
購読料（〒共）20回分1500円
30回分2000円

烽火
NOROSHI

共産主義者同盟（全国委員会）
大阪戦旗社 TEL (06) 371―3706
大阪市大淀区本庄中通3―33

5.15首都―5.21北熊本の成果踏み固め、蜂起―戦争派の総力で

6月闘争の全人民的高揚を

なだれ打つ清算主義に抗し党の武装を一層推し進めよ

反帝戦線（全国委）は、5・15沖縄闘争、5・21北熊本派兵阻止闘争を圧倒的に貫徹した。五月闘争は、ベトナムにおける北ベトナム―解放戦線の進撃と米帝の軍事的エスカレートを背景とし、沖縄の「太平洋の要石」としての役割が、一層鮮明になり、そしてそれを維持する為の、経済的収奪をはじめとする「琉球処分」としての内実が、明らかになる中で、新たな高揚へ向うねりの中で闘い抜かれた。戦い抜く者は常に傷つき倒れる。最も最先頭で闘い抜いて来た部分は、連合赤軍の敗北を契機に一定の混乱の様相を呈してはいる。だが、しかし、我が全国委員会の存在は、その様な混乱に終止符を打つ唯一の基盤である。全国委員会は、必ずや、蜂起、戦争派を、強固な、単一党に打ち固め、強まりつつある日和見主義的諸潮流の一夜の夢を粉みじんに吹き飛ばすであろう。五月連続闘争の一切の成果を、今六月以降の大衆的高揚の中で打ち固めよう。

ベトナムを基軸とする国際情勢

四～五月闘争の国際的背景は、ベトナム人民の快進撃とそれに対する米帝のベトナム港湾機雷封鎖等の、反革命的エスカレートであった。

これに対して、一方で一般的にベトナム人民の進撃を讃え、それとの連帯を主張する無党派的な主張があり、他方で中米会談、ニクソン訪ソと対応させて「反スタ主義の証し」としてこの進撃を評価する反スタ的主張がある。

だが、これらはいずれも自己満足以外の何ものでもなく、われわれは一方で米帝の世界戦略との関係で、他方では国際党派闘争の問題として明らかにしておかなければならない。何度も確認したように六八年ジョンソン声明による北爆停止以降の米帝の戦略は、ニクソンドクトリンとして、ベトナムでの敗北―後退に対するまき返しとして進行し、アジアで日帝を一層前面に押し出し、ベトナムではいわゆる「戦争のベトナム化」として南ベトナムのカイライ政権を強化することを通じて、できるかぎり米軍自身を前線から撤退させるものとしてであった。また同時にそのことは、現実の成功はありえないとしても、中米会談による中共との平和共存への移行の陰謀によって裏打ちされるものであった。

四月以来の北ベトナム―解放戦線の大攻勢と南ベトナム全土総決起への呼びかけは、こうした米帝の「ベトナム化」陰謀を徹底的に打ちくだいた。追いつめられたニクソンは、一方で、北ベトナム全港湾の機雷封鎖、連日数百波にわたるベトナム戦争最大の無差別爆撃による焦土化作戦、更には海兵隊の再上陸を準備し、文字通りこの戦争が米帝の強盗殺戮戦争たることを白日の下にさらしつつ、なお戦争の大義名分の最後の糸たるチュー・カイライ政権をかろうじて支え、他方で、米ソ会談でのソ連社会帝国主義との取引きに最後の望みを託したのである。

ベトナムへの侵略と反革命、人民の無差別虐殺が最大規模に展開されている真最中で、ニクソン訪ソを受け入れたソ連社帝は、五月二九日の米ソ両首脳声明において、その反革命性を存分に発揮した。すなわち、戦略核兵器の二大国独占を前提にした世界分割支配体制たる米ソ平和共存の基盤を確認した上で、西独との東方条約批准によるヨーロッパの安定化、アジア集団安保体制の陰謀、中東のアラブ革命勢力の押え込み（米ソ会談直後、PFLP指揮下で行なわれたと伝えられるテルアビブ空港のテロ戦は、明らかに米ソ取引きの反革命性に抗したものであった）等として現われ、ベトナム大攻勢の前にインドシナでの取引きを封じられたとはいえ、次なる妥協と取引きへの第一歩を鮮明にさし示すものである。その点で、戦略的限界性を示すとはいえ、原則的に対応した中米会談における中共とは、明らかに区別して把えねばならない。

北ベトナム―解放戦線に中米会談によるいわゆる新ジュネーヴ協定に対する危惧が存在したのは事実である。だが、むしろ彼等はそれを中共への批判としてではなく、ニクソンドクトリンに示される米帝の戦略の一環としてニクソン訪中を理解し、米帝への攻勢をかける事によってこれを打破せんとした。また中共も「小国」の立場を全面的に押し出し、社帝との党派闘争と米帝への「切り込み」として中米会談をもった事は、中共の戦略路線の党的限界を示しているとはいえ、反スタ諸派が言うようにベトナム人民へ敵対するものではなかった。おそらく、中米会談で米帝によって提出された南ベトナムの連合政権構想に対して、米軍の全面撤退をはじめとする北ベトナム―解放戦線の要求を支持しまた会談後も米帝による連合政権の陰謀への対応を協議し、中共の合意の上で攻勢があっただろうことは明らかである。そしてかかる中で、米帝による北ベトナムへの侵略エスカレートも、ベトナム―全インドシナ戦線での敗北とさらにこの度の攻勢による一層の敗退それによるチュー政権の動揺と「ベトナム化」政策の破産をとりつくろい、「ベトナム化」の条件を形成せんとするものである事はいうまでもない。

日帝の戦略と、社共との党派闘争

かくしてわれわれ日本プロレタリア人民の任務は、かかる米帝の戦略と更に日本「軍国主義」に対して闘う中―朝―インドシナ人民と連帯し、日米帝の侵略反革命の結節環としての沖縄「返還」協定を粉砕し、その具体的現われ―自衛隊派兵、米軍基地の強化再編、土地収奪など―現にベトナム出撃基地化しているのを粉砕することである。

米帝の現在の戦略は、先にも述べた如く、ニクソンドクトリンに示されている。これは六〇年代後半のベトナム人民の英雄的闘争による米帝の敗北と、それによる米国内部の政治的社会的危機の進行他方五八年以降の不均等発展による帝国主義間競争の激化がベトナム戦争により米帝の経済的危機を一層助長し、戦後ヤルタジュネーヴ体制を全面的に動揺させたのだが、かかるヤルタ体制崩壊期における米帝の戦略であった。

この反革命的戦略は、以降、政治的軍事的には日本、西独をアジアとヨーロッパの最有力なパートナーとして前面に押しだした侵略反革命的戦略の再編強化として、他方ではヨーロッパでの西独の東方政策に表現される、米ソ平和共存体制の一層の安定化と、更にニクソン訪中によって幻想に終ろうであろうとはいえ、中国との平和共存の陰謀を行ない、それらを前提としつつ「ベトナム化」を図るものとしてである。また経済的には、各国レートの調整―SDR創設―各国帝国主義への切上げ恫喝として自由化の要求、いわゆる南北問題での他帝国主義への肩代り等々としてIMF―GATT体制の再編を行うこととして展開されている。

かかる中で、日帝の沖縄「返還」以降の、従ってまたポスト佐藤の基本的課題は、①七〇年安保―沖縄「返還」協定の実質化②中国問題の解決③円切り上げ、不況脱出etcのIMF―GATT体制再編期の経済問題の解決である。

日帝は六〇年安保をメルクマールとして、いわゆる帝国主義的復活を完了し、更に六五年、日「韓」条約以降急速な対外的膨張を開始した。政治的軍事的にも七〇年安保―沖縄「返還」を通じて、先の米帝の戦略に照応し、沖縄への自衛隊派兵を要としつつ、日米「韓」台反革命体制を打ち固め、なかんずく釣魚台（ティアオユイタイ＝「尖閣列島」）の略奪をとおして中国―北朝鮮―インドシナへの最前線を形成するとともに排外主義を煽りたてている。また経済的政治的には、日「韓」会談以降急速に開始された海外投資はいわゆるアジア―太平洋圏に巨額に達し、ごく最近のスハルト政権への石油借款にもみられた如く、原料資源の確保と国家資本輸出にも媒介された直接資本投下等々として、アジア太平洋圏での経済的―政治的ヘゲモニーを著しく強化している。

中国問題の解決は、まさしくこのような軍事的―政治的―経済的ヘゲモニーを前提として日程に上っているのである。米帝の後退の中での民族解放闘争の前進に対し日帝が生きのびるには中国との対抗軸を形成することによって、アジアにおける政治的軍事的力量を示さねばならず、それは同時に経済的には原料資源と輸出市場の獲得のためにも重要であり不可欠である。自民党内部の「日中派」は、一部にいわれる自立派などではさらさらなく、さきの日米帝の基本的戦略を前提とした上での相対的なものにすぎず、プロレタリア人民を欺くための道具にしかすぎないのである。

また民社、公明の中道政権内閣は、前者は労働者階級内部の上層を基盤とし、後者は中小零細企業主や一部の下層労働者の利害を代表しているが これらの最近の日中国交回復路線は、それぞれの安保に対する「有事駐留論」や「段階的解消論」と一体のものとして存在することを含みておかねばならない。

これらは戦後ヤルタ体制のもとでは なかんづくアジアにおける日帝の位置からするならば殆んど実現不可能の路線であり プロレタリア人民の中に排外主義的―小市民的気分をもちこむものに他ならない。

更に社会党―総評は反軍国主義―日中国交回復を政策としつつ議会内闘路線を提起している。これは、ベトナム情勢と中国問題の前面化、岩国基地への核もちこみ等のいわゆる「軍国主義」化、自衛隊沖縄派兵等々の情勢のなかで、一方で日共に、他方で総評内部の右翼組合主義（IMF・JCなど）に引き裂かれるというスウ勢の一時的な停止として現われている。

だが現実にはこれは、ベトナム闘争との連帯、沖縄闘争を、このような反軍国主義という議会カンパニアと日中国交回復運動に流しこむものであり、先に述べた国際的なヤルタ体制の再編と日帝の侵略反革命体制への対決を回避すること以外のものではない。

日本共産党（宮本一派）の掲げる「民主連合政府」もまた国際階級闘争の発展の中で、その改良主義的本質を人民の前にさらけだしポスト佐藤の選挙準備に奔走し、下部の青年層から「造反」が起っているほどである。その反革命性をわれわれは何よりもその国際路線＝「自主独立」路線すなわち米帝に反対する平和と独立の反米帝統一戦線として提起している。だがこれは世界革命運動の一環としての民族解放―社会主義の闘争として闘われているのを「平和と独立」におし留めること、即ち平和共存路線の外の何者でもない。このかんの連合赤軍の闘争にかこつけてのブル新と一体となってのれる「毛沢東一派批判」は、彼らの社会帝国主義への純化に一層みがきがかかってきたことを示しており具体的には彼らのいう「ベトナム人民支援」が欺瞞であり、沖縄闘争における「即時無条件返還」が日帝による「返還」の合唱隊でしかないことを示している。

五月闘争の特徴と革命的左翼

五・一五闘争は、以上のべたベトナムにおける北ベトナム―解放戦線の進撃と米帝の軍事エスカレートを背景とし、沖縄の「太平洋の要石」としての役割が一層鮮明になり、経済的収奪をはじめとする「琉球処分」としての内実が明らかになる中で新たな高揚へ向うねりを示した。

だが、その高揚は、さしあたっては、大枠として社会党の軍国主義反対―日中国交回復の議会内闘路線や、日共の民主連合政府路線を強化する形で進行し、革命的左翼の運動は、その動員力においてもその内容においても現象的には後退さえ示しているかにみえる。

だが問題は、ある意味での過渡期ではありうる事態そのものよりもその中において、何を準備しつつあるか、という事である。即ち、われわれは、六九年から昨秋にかけてのわれわれ～中核派等の大衆的武装闘争、また我々―赤軍派―京浜安保共闘等の非公然武装闘争に表わされた階級闘争の一時期が転換期にあることをはっきりと把握し、かつ数年にわたる武装闘争の党的―全人民的経験という地平をふまえつつ、その過程であらわとなった、新左翼運動の反スタ的限界を克服し、次の党的飛躍と、それを前提とした階級闘争の再編と前進を獲得していかなければならない。

さて、我々は、昨秋闘争の総括として、「新左翼」運動の革命的翼と日和見主義的翼とへの分化について述べた。これは一層現実のものとなりつつある。

革マル派は、いわゆる革命主義批判によって日共と同じように日帝の危機を否定し、現実には動労～国労などに対してみられる如く産別方式による組合青年部の掌握と、民同の片足となることによって一定の伸長を示している。また社青同解放派も社会党―総評に溶りこむことによって彼らのいうところのソビエト運動の展開を主張している。

これらの部分は、六九年以降の階級闘争で問われた合法主義の克服と軍事問題・国際主義における反スタ主義・帝国主義的経済主義の克服＝総じて反スタ主義の止揚にまったく無縁の潮流である。この部分が現在の情勢下で一定の伸長を示したとしても、それは本質的に社民への屈服であり、社民の擁護のもとにあるものであり、つまり革命的翼とは無関係のものである。

以上の日共～革マル派～宮下派への党派闘争を前提としつつ、われわれは、革命的部分の党的飛躍とそれによる階級闘争の転換がいまだ過渡の段階にとどまっていることに規定された社民―人民戦線派の一定の「まき返し」の中で、それを突破すべき革命的翼の任務を明らかにしていかなければならない。

われわれは中核派について、古い党的立場から現下の階級闘争の新しい課題に接近しようとしている中間部分であると評価してきた。それは六九年以降の「組織」破防法下での権力との緊張関係をもっているという事に規定づけられたものであることは間違いない。また七〇年七・七華青闘告発以降の在日アジア人民の闘争・部落解放闘争・三里塚闘争などの権力と最先端で切りむすんでいる大衆への組織活動を展開し、そこで問われている問題に自己批判運動という形ではあれ接近していると述べてきた。

だが、これらは結局、党的立脚点の反スタ主義からの脱皮を媒介とする非合法党への組織改組によってのみ基礎づけられ、体系化されるものである。中核派の「組織」破防法攻撃に対する態度は、それを非合法党への組織改組と党的立脚点の根本的転換としてあるのではなく、「合法的運動の領域をあげわたさない」点に立場をおいた権力との緊張関係であること一言でいえば急進主義的立場であるということである。

中核派は、年頭論文で、そのことからの一歩の前進を「人民革命軍―武装遊撃隊の建設」としてふみ出しつつも、現実には革マル派との党派闘争に規定され、また連合赤軍の敗北にも影響されて中途において動揺している。そしてそれ以降は、いわゆる立川政治（全住民大会）五月佐世保集会への労働者サークルの全国的結集という形で次への展望を形成しようとしている。（これはわれわれのいう所の綱領―戦略に導かれた民主々義闘争＝全国単一の政治闘争と似て非なるものである。内容的にはわれわれが資本主義批判―プロ独樹立という立場から問題をたてるのに対して、彼らは疎外論―自己批判運動へ一種の無政府主義へと）して問題をたてている。）

だが、かかる領域での組織化は非合法軍事組織の建設に媒介されてのみ成功的に展開しうるのであり、この点からして、彼らの立川―佐世保政治が人民革命軍―武装遊撃隊建設の一定のゆきづまりの上に展開されていることは、決定的な限界を示している。われわれは中核派との党派闘争を理論闘争の領域でも一層おしすすめ、とりわけ実践的には、我々の党建設の渦の中へ彼らを導き入れる形で断固として展開していくであろう。

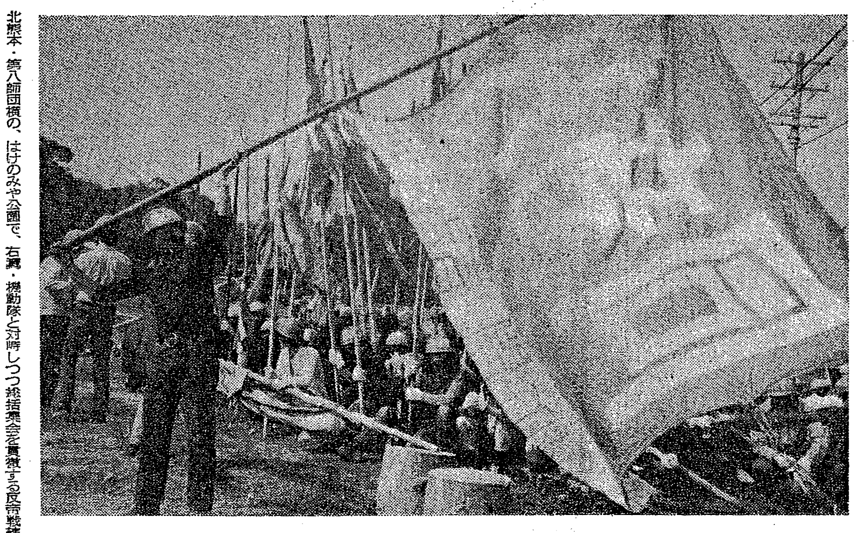
その過程は、いうまでもなく我々が推進してきた蜂起戦争派の党的統合の闘いと一体のものである。五月闘争のきわだった特徴の一つは、蜂起戦争派の無党派的分散状況という現実であった。それは何よりも赤軍派の連合赤軍「処刑」問題以降の無党派的解体状況に象徴されている。「人民内部の矛盾の処理……」「三種の軍隊」「人民に依拠し…団結団結大団結を」「一からのやり直し」……etc）。これらの悲痛ではあるが無惨な立場の喪失は、傾向として毛沢東主義への屈服（上野氏のベトナム労働党への屈服、花園氏の戦略論でのそれ）として現われ実践的には無党派主義、人民への回帰としてあり、またその点に於てレーニン研の内容と一致する。

それらが六九年以降の武装闘争の展開と「処刑」問題という形での破綻であることを踏まえつつも、共通の いわば「人民の 友」として。

われわれは、かかる毛沢東主義への屈伏と無党派的解体状況と、それによるレーニン研をはじめとする六九年の地平を踏まえぬ部分との無自覚な結びつきを断固として原則的に批判しなければならない。

かかる中で綱領、戦略問題の解決―非合法軍事組織を軸とする組織問題へとつめあげること―民主々義闘争を正しく指導する事によってプロレタリア人民を組織する事、これらを同時一体的に展開するという我々の立場を一層鮮明にしなければならない。このような我々の党建設路線に中核派、赤軍派を導き入れ、これらとの党派闘争を原則的にかつ徹底的に行い無党派的先進的大衆、及び蜂起戦争派をわれわれの党建設の渦の中に導き入れること、その大事業の核心に我々はさしかかっているのである。

【三面へ続く】



北熊本・第八師団横の、はけのみや公園で、右翼・機動隊と対峙しつつ総括集会を貫徹する反帝戦線（全国委）・叛軍の雄姿。

5・15首都―5・21北熊本を貫く

反帝戦線 全国を席巻（詳細二面）

帝国主義者の血ぬられた野望へのしゃにむの突進―5・15沖縄「返還」策動と、帝国主義軍隊の沖縄派兵に抗し、本土―沖縄のプロレタリアート人民は、断固闘いに決起した。とりわけ、革命への情熱と献身を一身に体現している我が同盟（全国委）を先頭にした、蜂起―戦争派に結集する革命的労働者人民は、降りしきる雨をものともせず全国から総結集し、清水谷公園で密集した集会と断固たる意志統一をかちとった。連合赤軍の敗北以降、当の赤軍派、革命左派の指導中枢すらもが、清算主義的に、あるいは毛派、あるいは社民へ乗り移ってゆく現下にあって、党建設の歩みを遅らせることなく、断固として、武装した革命党建設路線を推進してゆくことを意志統一した我々は、その余勢をかって、どとうの如く5月21日、帝国主義軍隊の沖縄派兵の前進基地、北熊本へ進撃したのである。沖縄を巡る攻防は、七〇年代の全攻防の質を決定するかぎである。我々労働者階級の未来を沖縄の一点に凝縮して闘い抜くことなしに、帝国主義ブルジョアジーとの攻防を新たな段階へ押し上げることは出来ない。6～7月派兵阻止闘争へ更に本格的につき進め。

7・6共産同政治集会

とき 7月6日午後5時30分

ところ 京都商工会議所ホール（阪急「四条烏丸」下車北へ・京都新聞社前）

基調報告 「ブント党内闘争の歴史的意義と単一党建設へむけた課題」 永井武夫

あいさつ 共産同（全国委）RG被告団 隊友反戦（京都支部）、保安処分粉砕全国共闘会議ほか

主催 共産主義者同盟（全国委員会）

夏期一時金 三割カンパの要請

共産主義者同盟（全国委）

すべての、心ある労働者、市民の皆さん！わが共産主義者同盟（全国委員会）は、「勝利か死か！」というかたちで革命と反革命のせめぎ合いがいよいよもって本格的となりつつあるこの72年の半ばにあって、すべての心ある労働者、市民の皆さんに対して、夏期一時金三割カンパの要請を致します。

ベトナム人民の大進撃、連合赤軍の銃撃戦―「粛清事件」―なだれうつ清算主義的「自己批判」による根底的敗北、5・15沖縄「返還」と自衛隊沖縄派兵のなしくずし的進行と、この間の諸事態は、明らかに、蜂起―臨時革命政府樹立と体系的非合法党建設への道を大胆に歩みはじめた我々の、その主体的任務の重さを示して余りあります。

わが同盟（全国委員会）は、昨秋、沖縄「返還」協定批准阻止闘争の烈火の中で、同盟の党派性をひと握りの戦闘団政治に低め赤軍派への解体を準備することにより階級闘争から昇天した旧「左派」グループと、それに追随し帝国主義的経済主義への道を一路ひた走り自らの頭の中でのみ「革命戦争を開始」した共産主義者同盟（RG）を僭称する「赤報」グループとタモトを分かち、独力で日本階級闘争を蜂起―臨時革命政府樹立へむけて領導し抜くべく困難ではあるがしかし最も確実に「勝利の大道」を歩みはじめました。

そして、われわれは、昨秋・批准阻止闘争を北大阪武装占拠闘争＝密集遊撃戦として貫徹することによって革命的翼と日和見主義的翼との実践的分岐を体現、その後、自衛隊沖縄派兵阻止闘争をはじめ、平和台病院闘争・内藤建設闘争など諸労働戦線、関大など学生戦線や、入管戦線、部落解放戦線などの提起する問題を内在化し、かつそれらを蜂起―臨時革命政府樹立の闘いへ糾合せしめるべき党建設へ大胆な一歩を踏み出しています。

このような中で、4・28全国総決起―5・15首都総結集―5・21北熊本現地闘争と闘われた今春闘争は、昨秋で闘いとった革命的翼と日和見主義的翼との分岐が、革マル派、宮下派の一層の社民への屈服、中核派の党的動揺、そしてわが蜂起戦争派の一部に発生しつつある「赤ヘル社民」への傾向と、ますます大規模に進行していることを示しています。そして、5・15、「返還」以降の、全党派のおちいっているある種の、「虚脱状況」を、われわれは「日米帝国主義の侵略反革命前線基地＝沖縄を蜂起―臨時革命政府樹立の拠点として打ち固めよ！」という実践的方向を明示することによって突破せねばなりません。

かくして、わが同盟（全国委員会）の双肩には、70年代を蜂起―臨時革命政府樹立へむけた一時代とすべく、巨大な任務が課せられています。この課題を実現するための物質的条件たる獄中同志の奪還、中央集権体制―全国体制の確立、非合法軍事組織の拡充、諸闘争の党の下への体系化―非合法党の確立、等々には、ぼう大な資金を必要とします。今日、「財政問題は高度の政治問題である」といわれるゆえんです。かつてわが同盟は、党―軍建設の資金調達のためにブルジョアジーの別荘に対する強制収奪闘争を敢行した経験をもっていますが、今日その切り拓いた地平は高く評価されねばならないとしても、基本的にそれは一方では党の陣型の下におけるプロレタリア・人民の党への献金によって支えられねばならないことはいうまでもありません。

70年代を蜂起―臨時革命政府樹立へむけた一時代とするために 心ある労働者、市民の皆さんに対し夏期一時金三割カンパを切に要請します。

なお郵送の方は、上記、大阪戦旗社へお願いします。

休刊のお知らせ

五月二十日号は都合により休刊とし、本号をもって二七五号とします。（編集部）

5・15首都総結集―5・21北熊本闘争を打ち抜く

派兵阻止へ反帝戦線の勇姿、全国を席巻

派兵部隊集結地へ進撃　右翼・機動隊はねのけ

5.21北熊本

12・18路線の紅い旗を堅持し、スタ・反スタ解体＝世界単一党建設、蜂起・臨革政府樹立へ向け頑強な闘いを組織しているわが反帝戦線（全国委）は、『北熊本―沖縄へ武装進撃し、自衛隊沖縄派兵の前に立ちはだかれ！』の鮮明なスローガンのもと、4・28（全国）～5・15（首都）にかける蜂起―戦争派の大衆的戦闘的決起の革命的成果を唯一受け継ぎ、革マル派・宮下右派の脱落、また当初から政治警察の闘争破壊策動―機動隊・右翼による暴力的敵対の一切をはね返し、5・21北熊本現地派兵阻止闘争を圧倒的に担い抜いた。

五月二一日午前十時十五分、一切の反革命、とりわけ右翼の襲撃をはね返す強固な武装を貫徹した反帝戦線（全国委）の下に結集した百三十名を基本部隊とする蜂起―戦争派百五十名の堂々たる隊列が戒厳令下の熊本駅に登場、多くの労働者・市民が、日帝のアジア侵略反革命と真向うから対決する真紅のヘルに注目する中、全九州から二千余名の制私服を動員した官憲の不当検問を突破して、ただちに花畑公園へと進軍した。

午前十一時、右翼・機動隊・反革命党派の武装襲撃に対する防衛隊の配置をおえ、ただちに、「5・21自衛隊沖縄派兵阻止！西部方面総監部・第八師団駐屯地解体！北熊本現地総決起集会」が圧倒的な熊本の労働者・学生・市民の見守る中で開催された。

初めに、この間の関西に於る蜂起―戦争派の沖縄闘争、とりわけ4・28の二千名の結集による御堂筋制圧の大デモ、5・15首都総進撃、今また、5・21北熊本現地闘争を責任をもって組織してきた沖縄委代表・児玉喜派氏から、基調提起をうけた。

即ち、「5・15『式典』粉砕！派兵阻止！蜂起―戦争派首都大統一行動は、革マル・宮下右派の陥没の中で、どの潮流が真に72年沖縄闘争―70年代権力闘争を荷い切るのか、を明確にさし示した。本日の北熊本現地闘争は、第一に、68年以降の米帝の敗北と後退の中にあってその巻き返しをねらうニクソン・ドクトリン＝『アジアのアジア化』と結合してアジア侵略反革命戦争へのり出そうとする日帝の第一歩が沖縄『返還』・自衛隊派兵・釣魚台略奪であり、この粉砕は、『ベトナムのベトナム化』―連合政権構想を打ち砕いて進撃する中―朝―インドシナ人民の大反攻と直接に連帯する国際主義的闘いであり、弾圧闘い抜き、『日米帝の侵略反革命前線基地＝沖縄を日本革命（蜂起・世界革命戦争の機関としての臨革政府樹立）の戦略的拠点、武装闘争の砦として打ち固め』ねばならぬこと。

第二に、この闘いは、5・15『返還』を通して一層強化された日帝の沖縄労働者人民に対する差別分断支配―米軍の銃剣の支配に対する徹底した民主主義闘争を、社共人民戦線派の『復帰』による言いくるめと決別して推し進めている沖縄人民との熱い団結で闘いとることによってのみ可能であること。

第三に、本日の現地闘争を放棄し逃亡した革マル・宮下右派はいうに及ばず、連合赤軍の敗北以降その立脚点（反スタ・マルクス主義）故に、右転換せざるを得なかった中核派の諸君の『地域住民闘争』路線との的党派闘争を断乎強化し、逆にそのことによって、蜂起―戦争派内の赤ヘル社民の最後的解体・再編をかちとらねばならぬこと。

以上を踏え、本日の闘いを最後まで戦闘的に闘いぬき、更に七月沖縄への武装進撃を！」と。

続いて、わが蜂起―戦争派の北熊本への大挙の登場に恐れをなした右翼が熊本市内数ケ所に総計百名が結集しつつも、わが真紅の『全国委』旗を先頭とする鉄の武装の前に手をこまねいていることが報告され、次に、北は東北から南は沖縄まで全国各地から結集した戦線アピールを受けた。

〈5・21〉の戦闘的中核として右翼機動隊の襲撃に対する武装を貫徹した反帝戦線全国委からのアピールをはじめ、〈5・15〉を我が全国委とともに荷い抜き、十数名の強固な隊列で北熊本へと進撃してきた『鉄の戦線』派反帝戦線・専修大反帝戦線の諸君のアピール、東北の地から革命的に結集した岩手大マルクス・レーニン研・仙台労学戦線の代表からのアピール、京都学生戦線の革命的再編の推進力として京大C戦線の〈5・21〉からの脱落を糾弾しつつ圧倒的に決起した済北戦線・立命大L戦線のアピール、更に、「沖縄に真紅の『医学連』旗をうち立て、沖縄の医療戦線の同志達との団結で、派兵阻止をかちとる」との決意表明を行なった医学連の同志、隊友反戦（京都支部）の戦闘的アピールに続いて、既に躍動を開始した反帝戦線（全国委）沖縄地方委からのアピールが提起された。

即ち、「新民主主義革命論―人民戦争路線を実践し、49年中国革命の勝利を導いた中国共産党と中国人民は、更に、中ソ論争～プロ文革を経る中で、民族解放闘争の『大後方』として打ち固めてきたこの中―朝―インドシナ人民の闘いの前に戦後ヤルタ体制は崩壊を余儀なくされており、その矛盾は日米帝の侵略反革命前線基地＝沖縄の『返還』―派兵を通した一層の強化の中で沖縄労働者人民の怒りと憎しみをまきおこしている。

5・15『返還』をもって沖縄闘争は革マル・宮下右派の言うごとく終ったのではない。沖縄労働者人民との熱い団結で、沖縄を蜂起・臨革政府樹立の戦略的拠点へと転化するのか否か――我が沖縄地方委は、人民党・社大党・革マルとの党派闘争にうちかち不抜の非合法党を沖縄に根づかせる中で勝利の旗を掲げるであろう！」。

圧倒的な拍手と『異議ナシ』の声の中、更に、この間の平和台病院闘争等の階級的労働運動の実践の中から決起した関西地区叛軍の決意表明をもって、集会の全過程をおえ、ただちに、自衛隊沖縄派兵部隊の集結地、第八師団駐屯地に向けた圧倒的なデモンストレーションへと進軍した。

第八師団駐屯地が近づくにつれ機動隊の暴行はひどくなる。

駐屯地前に至るや、密集した我が部隊は「沖縄労働者人民との固い連帯で、派兵阻止をかちとるぞ！」「反戦兵士は決起せよ！」と断乎たるシュプレヒコールで闘い抜いたのであり、宣伝カーと石とパットで反革命襲撃を行なおうとした右翼は我々に触れることすらできず、権力のなぐさめでスゴスゴとひき下がる始末だったのである。

更に、右翼機動隊の弾圧が続く中で我が反帝戦線（全国委）を基本部隊とする革命的隊列は、戦闘隊型を崩すことなく、はけのみや公園での総括集会をかちとった。

反帝戦線（全国委）の同志は、今春4・28全国総決起から開始された蜂起―戦争派の怒濤の進撃とその党的再編の闘いの一切の成果が結実したものとして、5・21北熊本現地闘争の総括を提起し、更に、「七月派兵阻止の戦列打ち固め、再び、沖縄で再会しよう。我が『全国委』旗は、沖縄の空に高く掲げられん！」と提起した。

軍都・熊本のシンボル―「肉弾三烈士の碑」を背に「派兵阻止・蜂起―戦争派集会」を貫徹する反帝戦線（全国委）・叛軍（5月21日、花畑公園）

5.15首都　式典粉砕へ600名決起

蜂起―戦争派が中央結集

5・15「返還」式典粉砕闘争を貫徹し東京駅構内で圧倒的な総結集会を行なう反帝戦線（全国委）と蜂起―戦争派の陣容。

沖縄「返還」式典なる猿芝居が佐藤を式典委員長として演じられた十五日、沖縄「返還」式典粉砕！自衛隊沖縄派兵阻止！世界革命戦争勝利！5・15中央大総一行動は、全国から総結集した六百名によって、降りしきる雨をものともせず午後三時から清水谷公園で闘いとられた。本集会は、かの『連合赤軍事件』以来のなだれ打つ清算主義的「自己批判」の横行の中で、昨4・28清水谷集会以来の十三ヵ月ぶりの蜂起―戦争派中央総結集の全人民的政治闘争として闘われ、わが蜂起―戦争派のブルジョアジーへの更なる宣戦布告としてなされた。

集会は、関西地区叛軍連絡会議と東京叛軍行動委員会の司会で進められた。発言に立った反帝戦線（全国委）の同志は、「インドシナ解放武装勢力の勝利的前進はニクソン・ドクトリンを決定的破産に追い込み、米帝が北ベトナム港湾機雷封鎖による最後的カケによりその延命を図ろうとしている中で、日帝のアジア侵略反革命への全面的乗り出しの宣言がこの『返還』であり派兵である。このような策動に対しわれわれは、インドシナ人民の大反攻と固く結合し、69年以降の階級闘争の局面を切り拓いてきた非公然武装闘争と、『下層』人民の民主主義を闘いとる闘争を、単一の全国闘争にまとめ上げてゆかねばならない。全ての先進的労働者、学生は北熊本―沖縄へ武装進撃し自衛隊沖縄派兵の前に立ちはだかれ！蜂起―戦争へ！」と発言した。

派の分解―拡散を止揚し体系的非合法党建設の下、新たな飛躍―統合を勝ちとれ！」と鮮明に政治基調を提起した。鉄の戦線派反帝戦線ほかの発言もあった。

諸戦線、諸組織の発言に移り、保安処分粉砕全国共闘会議は「刑法改正―保安処分粉砕闘争を更に深化・拡大せよ」とアピール、医学連に続いて大衆的な決意で結集した博学連は「反革命総合医療体制粉砕へむけ医学連と連帯して闘う」と発言した。また、RG裁判闘争支援委員会は「一部の諸君が言っているような『武装闘争を担う戦士とそれを包む人民の海』という一般的な問題のたて方では『組織』破防法体制下の革命闘争の一環としての反弾圧戦線は担えない」と鋭く指摘、京都の地でレーニン研を筆頭とする赤ヘル・ノンセクトの赤ヘル社民化と闘い抜きつつ本集会に結集した済北戦線―立命大L戦線の代表は、体系的非合法党建設と結合した大衆戦線を強固に建設する、と決意表明し京大レーニン研―C戦線の本集会からの脱落を厳しく批判した。ほかに、現代思想研究会、破防法弾圧と闘う会もアピールした。

最後に、実行委の主要構成団体から関西地区叛軍、東京叛軍、7・7アピール運動協の発言を受け司会の関西地区叛軍の同志のまとめで集会を終えた。

反帝戦線（全国委）の旗の下に結集した二百名を基本部隊とする強固な隊列でデモンストレーションに移り、わが蜂起―戦争派の戦列は都心部を席巻した。なお、この間の「爆弾闘争」に恐怖した機動隊は、たまたまデモ隊の横を通りかかった通行人さえ、こずき回して無理矢理隊列へ入れるといった暴挙を行なう始末であった。

東京駅八重洲口構内において統一解散集会を貫徹、反帝戦線（全国委）の代表は、「『連合赤軍事件』以来のなだれうつ清算主義の中で、第二次ブントの成果と限界を正しく対象化し蜂起―臨時革命政権樹立へむけた勝利の大道を責任をもって領導できるのは反帝戦線（全国委）以外になく、われわれはまたこの任務を果たし切る決意である。全ての先進的労働者・学生は最後の勝利めざしわが戦線に加われ！」と熱烈なアピールを行ない、満場の拍手に包まれた。

派兵阻止闘争の最前線に「高共闘」旗を翻せ

5・11結成集会勝ちとる

我々戦う高校生は、「派兵阻止」全関西高共闘結成大会を、去る五月十一日に、大阪電々会館において五十数名の革命的な全関西の高校生の結集でもって克ち取った。

我々は、三月中旬から四月下旬にかけて、阪京沿線の高校を軸に全関西の高校へと組織していった。その結集軸は、第一に、現在の高校生運動の後退的、サークル的分散状況を突破するために、統一された理論と組織が必要である。第二に、72年階級攻防の最大攻防環＝自衛隊沖縄派兵阻止の闘いを、強固な国際主義の内実で武装された、高校生部隊でやり抜かねばならない。第三に、沖縄闘争を闘うにあたって我々は、中核の『奪還論』の破産としての一国主義、民族主義ではなく、宮下派の「返還粉砕」＝「日帝の反革命統合粉砕」「併合粉砕」と言う、一国主義や帝国主義経済主義ではなく、もちろん革マルの「解放」ではなく、沖縄の国際的、国内的位地を把握し、中―朝―インドシナ三国人民との連帯と、沖縄人民との階級的団結を克ち取るものとして闘っていくという事である。

この三つを重要な結集軸として4・28～5・15（首都）、21（北熊本）へと進撃し、派兵阻止の隊列を固めていったのである。

次に、最初に報告した結成大会の内容を述べて行く事にする。

五月十一日の午後六時より、寝屋川高会学館の同志の力強い発言により、集会が始められ、基調報告として、「派兵阻止」全関西高共闘議長から、次のような提起と決意表明を、受けていった。「現在の高校生運動の後退的、サークル的分散状況は、71年六月の八派共闘分解により明確な政治基準をもっていなかったので、どの潮流と結合すればよいかが不明確になったのと、日帝のアジアへ向けた侵略反革命戦線遂行体制の構築のために、更なる弾圧の強化の前に"点"として孤立化させられていき、現在の状況がもたらされたのであり、これをどのように突破していくかが、問われているのである。過去の連合、野合としてではなく、（最低限の）統一された理論と組織で突破しなければならない。

次に、沖縄返還協定―自衛隊派兵に抗して、どのように闘わなければならないのかが述べられた。

戦後世界支配体制としてのヤルタジュネーブ体制は、主体的要因として、インドシナ三国人民の民族解放＝社会主義としての英雄的な闘いと、中ソ論争―プロ文革を通じて、実質的「大後方」となった中国共産党により、客観的要因として、帝国主義の不均等発展により、米帝の相対的地位の低下として崩壊したのであり、これを米帝は、新世界戦略として、①中米会談、②新経済政策、③日米「韓」台反革命体制の再編―強化として立てたのであるが、①②では、立て直されないばかりか、更に後退を余儀なくされている中に在って何が何でも、③でもって、世界支配体制を立て直さなければならなくなっている。そして日米共同声明、ニクソン・ドクトリンの実質化として、沖縄返還―自衛隊派兵が目論まれたのである。

日帝にとって言えば、この様な米帝の戦略に組み込まれているのと、アジアでの最後の、唯一の帝国主義として、延命の道をアジアへ求めざるを得なくなっているのである。これを沖縄返還―自衛隊派兵としてやろうとしているのである。佐藤政府のこれにかけた姿を見れば解る。沖縄はこの様な国際的、国内的な結節環として位置しているのである。我々は、この帝国主義側の結節環を打ち砕くことにより、沖縄を国際的、国内的な階級闘争の結節環として打ち固めなければならない。

沖縄は、戦後一貫して侵略反革命前線基地として維持されてきたのであり、今もそうである。我々は、中―朝―インドシナ三国人民の圧殺の前線基地を解体し、革命勢力の拠点として打ち固めることにより、中―朝―インドシナ三国人民との、国際主義を克ち取るための結合環として、今春の派兵阻止闘争を闘わねばならないのと同時に、明治以来、一貫して差別支配を、沖縄人民は強いられてきたのであり、現在、いわば第三次琉球処分として、日帝は行なおうとしているのであり、これに対する闘いとして沖縄現地では、全軍労の闘い、反戦地主の闘い、中小組織労働者の闘い等として、真赤な勢いで燃え広がっている。この民主々義闘争を日本革命の戦略環として断固として、闘って行かなければならない」と圧倒的に提起した。

われわれは、各学園での闘いを次の様に設定して行かなければならない。①各学園で民主々義闘争を闘う事を通じて、確固とした闘争組織を作るのと、われわれの権利を一つ一つ獲得して行く事、②大胆に各学園に政治をもち込む③諸々の地域闘争との結合を通じて"観念的""インテリ的"に階級闘争にかかわるのを、実践を通じて払拭していかなければならない。

次に、特別アピールとして、隊友反戦京都支部からアピールを受け連帯アピールを大和川行動戦線から受け、戦線のアピールとして、吹田高叛軍、大手前高沖闘委、寝屋川高会学館、竜連高沖闘委、日吉丘、豊中、樟蔭の各高校から受け5月～8月にかけて打ち続く派兵阻止闘争へ決起する事を全ての同志とともに確認し、スローガン採たく、インター！の斉唱をやり、八時四五分に結成大会を終えた。

全ての高校生は「派兵阻止」全関西高共闘に結集し、派兵阻止闘争を闘い抜き、権力―学校当局の弾圧をはね返せ。

首都で前段総決起集会

5・14全国委筆頭に300名

我々は5・14集会を圧倒的に勝ちとり、5・15清水谷全国統一行動に結集し、更に北熊本現地闘争に断固として革命戦士を送り出したことをあわせて報告したい。

5・14集会は、会場の恵比寿区民会館を二百五十のヘルメット部隊でうめつくし、圧倒的に勝ち取られた。RG支援委、医学連、東京叛軍、7・7アピール協等を中軸にした実行委主催により、現思研桃山大連合戦線等の参加を含め、政治警察の包囲の下、集会は断固として勝ち取られた。

この集会は、何よりもあの「連合赤軍事件」以降、混迷、動揺している新左翼運動の現段階に対し明確化し、革命的左派の再編に向け勝ち取られた。それ故、集会は、はっきりと①「連合赤軍事件」の総括②沖縄闘争をめぐる国際主義③「組織」破防法攻撃として現出している権力問題、を真向うから取りあげることを、その視座としていた。

RG支援委員会の同志、千葉工大保安闘の同志は、はっきりと上記三点に対し、明確な綱領を提出し、基調をリードしていった。RG支援委の同志は、「連合赤軍事件」の総括を、何よりも連合赤軍に集中的に体現され、そして破産を余儀なくされていったところの新左翼運動総体の反スタ・マルクス主義的限界の克服として、綱領・組織・戦略総体の点検として行なわなければならないことを、第一に明らかにした。そして第二に「連合赤軍」の総括を正しく行えないがため、革命的左翼内部に、社民への屈服、人民戦線派への屈服を進める部分がでてきており、またその中には、解党主義、日和見主義へ転化せんとしている部分が存在していることに、はっきりと警告を述べた。

すなわち、一方における、一般的に大衆との結合を語ることによって、党が大衆に根をおろすことと、党の大衆への溶解を意識的に混同し、無党派大連合を夢みる解党主義者、同時にその傾向が、日帝の侵略反革命に向けた官僚的警察的支配、とりわけ「組織」破防法攻撃との闘いを軽視していくがゆえに、不断に社民的体質をあらわにしていく部分の批判として、また一方においては、毛沢東の統一戦線政策の無批判的摂取、更には51年綱領への一定の屈服を通じ人民戦線派に屈服し、スターリニズムに対する党派性を溶解させていく傾向に対する批判を断固として貫徹していった。

まさしく問題なのは、一般的に新左翼運動の持っていた帝国主義的経済主義、小児病的偏向により連合赤軍敗北をとらえ、「人民の中へ」或いは「広範な統一戦線」を提起することなのではなく、そのような偏向を生み出していったところの反スタ・トロッキズム的限界を、綱領、戦略レベルにおける総括としてなしきることなのである。

周知のように、新左翼運動における帝国主義的経済主義は、日共の二段階戦略批判における批判のしかたにその根源を見ることができる。我々は、二段階戦略批判をレーニン的最大限―最小限綱領とスターリン的それの差異として見るのではなく、ブハーリン最大限綱領主義に、或いはトロッキーの過渡的綱領をよりどころとして批判してきた。それ故、逆に一般的に帝国主義的経済主義の克服を「人民の中へ」「広範な統一戦線」として実践的方針へ短絡させた場合、不可避的にスターリニズムの美化、社会民主主義派の美化に陥らざるをえないのであり、更にそれらへの屈服へ連なるのである。

RG支援委の同志は、以上のことを明確に主張し、集会参加者の一部に見られた混乱に対し、明確な方向をさししめした。

更に、千葉工大保安闘、医学連の同志から「戦後ヤルタ・ジュネーブ体制の崩壊局面における日帝のアジア侵略反革命へののりだしと対決し、国内再編の過程で、増々高まるプロレタリア人民の怒りを、官僚的、警察的独裁支配を打ち破り『組織』破防法体制下の革命闘争、発展、領導していこう」との発言を得、更に、5・15闘争を闘い抜き、北熊本、沖縄へ武装進撃しようとの提起をうけ、闘いの方向性を確認していった。

全国のプロレタリア戦士、兄弟姉妹、友人諸君！首都圏委は、不抜の全国党建設の為、断固として闘い抜く決意である。我々もまた、沖縄現闘に〇名を派遣し、闘い抜くだろう。全ての革命的労働者、学生、高校生は、6・15清水谷集会に結集せよ！

5.15―21へ戦列固む

〜〜北ベトナム港湾機雷封鎖粉砕〜〜

5.12関西闘争に400名

五月九日の米帝による北ベトナム港湾の機雷封鎖という緊迫した情勢のなかで、五月十二日、「米帝による北ベトナム港湾封鎖粉砕・五・一五『返還』式典粉砕全関西労学統一行動」が京都円山公園で開かれた。当日学生大会を大衆的にかちとりストを貫徹した同大全学闘をはじめ、労働者、高校生学生戦線、など四〇〇名が結集した。集会は四・二八実行委員会を継承した関西地区叛軍など三団体によって運営され、発言の最後にたった反帝戦線全国委員会の同志は、蜂起戦争派の中に潜む清算主義的傾向、党建設における日和見主義的傾向と闘い克服し、党的再編をかちとる課題が緊要のものであることを指摘しつつ「五・一五首都・清水谷公園の蜂起戦争派の旗の下に結集し、『式典』粉砕―北熊本―沖縄へ進撃し、自衛隊沖縄派兵の前に立ちはだかれ」との鮮明な行動提起でしめくくった。集会後の戦闘的デモにおいて権力は不当にも一名の同志を奪い去ったが、全部隊は最後まで屈することなく闘いぬき　一五首都闘争への決意を一層固めたのである。

スケジュール

6・15【関西】

60年安保闘争12周年、自衛隊沖縄派兵阻止／日帝による釣魚台略奪阻止／出入国法粉砕／ベトナム出撃粉砕！

6・15全関西統一行動（午後6時、京都・円山公園野外音楽堂）

主催　6・15闘争実行委員会

【東京】

60年安保闘争12周年、自衛隊沖縄派兵阻止／世界革命戦争勝利！

6・15首都統一行動（午後6時、清水谷公園）

主催　実行委員会

6・23【関西】

70年安保自動延長2周年

6・23全関西統一行動（午後6時、大阪中之島・剣先公園）

【東京】

詳細未定

7・6　**共産同政治集会**（要項は別記）

7・7　芦溝橋事件35周年、華青闘告発2周年

7・7反入管集会（詳細未定）

共産主義者同盟・理論機関誌
「共産主義」
14.15号残部僅少

同盟12・18路線の意義と限界

綱領・戦略の確立のために

共産主義者同盟14年の歴史は、スターリン主義の荒廃に抗し、民族解放・社会主義革命戦争の前進に援けられつつ、日本階級闘争における六全協の廃墟の中から、革命闘争の再生と発展のための血みどろの闘いの歴史である。六〇年代階級闘争を最前衛として領導し、一〇・八以降の実力闘争・武装闘争を闘いながら、にも拘らず思想的・政治的・組織的な分解を急速度に進行させざるをえなかったところのブンドの歴史的役割と限界を、その根拠から解明し克服することが、我々の任務である。70年12・18はまさしくその思想的出発点を形成しながらも、なおいまだ主観主義的な政治路線への傾斜を色濃くもち、反スタ・マルクス主義を実践的に克服し、組織の質を転換することはできなかった。　共産同（全国委）結成以後の半年余の闘いは、まさしくわが体内に残る反スタ主義との闘争であり、理論的には、真のマルクス・レーニン主義の継承に立つ綱領・戦略の獲得へ向けての巨歩を大胆に踏み出す作業であった。いまだその作業は端初についたばかりであるが、連合赤軍の敗北と路線的破産の結果、広範に政治的乗り移りと清算主義が横行しつつある現在、わが同盟（全国委）の果たすべき任務に明確に答えてゆくことを要請されている。「綱領・戦略確立のために」の一環として今号以降継続的に公表されていくはずの諸論文は、諸党派批判、国際共産主義運動の総括、資本主義批判の深化と権力闘争等として、いろんな形式をとりながらも、現在の革命的左翼内部の思想的混乱と政治的解体状況を止揚し、単一非合法党建設に向けての着実な前進を獲得していくであろう。

今号においては、その序論的論文として、12・18路線の果たした客観的な役割と限界を概括的に把え返すことに問題を設定して書かれていることに留意されたい。（編集局）

反スタ・マルクス主義の分解と党派再編

ベトナム民族解放戦線を最先頭とした、中、朝、インドシナ三国人民の革命戦争の勝利的進撃は、七〇年代に入って愈々終幕的段階を迎え、第二次世界大戦後においてヤルタ・ジュネーブ体制として確立された米帝の一元的支配構造を、遂に崩壊せしめ、更に南ベトナム、チュー・カイライ政権と、米帝に対する壊滅的攻撃の局面に於いて、米帝ニクソンは絶望的強行策によって必死に窮状を脱し様としている。

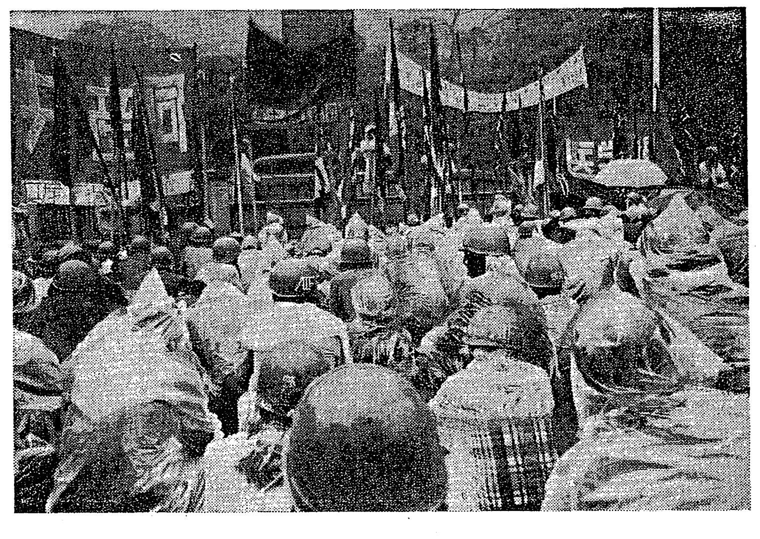
ニクソン特別報告は、北ベトナムの全ての港湾に機雷を敷設する事により、北ベトナムの海上からの戦闘、補給作成を阻止し、更に北ベトナム領土内に於ける交通、運輸、通信諸施設はもとより軍事目標に対する海、空よりの全面攻撃を打ち出す事により、ほぼ無差別爆撃」に近い布陣をしく事を明らかにした。この米帝の狂気の、死のあがきは、増々強力で、着実なベトナム人民の反撃によって、決着の一歩手前まで到達しつつある。

更にニクソンのまきかえし策は、「米ソ会談」等によって新たな画策を試みながらも、中、朝、インドシナ人民の革命戦争の国際的陣型にクサビを打ち込む事には成功していない。

又戦後、米帝と並んで、ヤルタ・ジュネーブ体制の基軸を形成して来た、ソ連社帝の動向は依然「対米関係」に基軸をすえながら、一方において中、朝、インドシナの動向と対峙し、ケンセイしながら、他方においては、「欧州安保」(ex、ベルリン「平和」、「独ソ条約」、「独ポ条約」、etc)、「アジア安保」構想を追求する事により新たな中朝インドシナの包囲体制の再編を意図しているかの如き様相をおびている。

この様な国際的権力再編の動向に直接規定づけられた日帝は愈々米日侵略反革命戦争遂行体制の確立へ向けて、「沖縄返還」にともなう侵略反革命軍事基地としての再編強化を露骨に強行し、反革命軍事行動に直接乗りだそうとしている。

だがその「基本路線」においては日帝は、いまだ多くの不明確さを残したままで、ひとまず国民の耳目を「ポスト佐藤」の茶番劇の観覧に集中させ様としている。



同盟12・18路線の成果と限界を見事に体現した、71年4・28清水谷・蜂起ー戦争派三派集会の成功と日比谷公園における日向一派への軍事的敗北による八派共闘集会への介入の未貫徹。ー以来雌伏一年同盟（全国委）を基本部隊とする蜂起ー戦争派は、2・26ー27保安処分粉砕中央闘争に続き、5・15首都・清水谷公園に六百余名の陣容を登場せしめた。

六九年安保決戦に於いて敗北した、日本に於ける革命勢力は、その後自らの七〇年代革命闘争に対する基本路線の確定をめぐって、激しい党派再編を推し進め、昨秋十一月沖縄闘争から、本年四〜五月闘争を経る中で、ようやくにしてその特徴的動向を示しつつある。

まさにこの六九年末から、七二年前半においてドラスティックに進行した日本革命的諸派内部における党派再編は、愈々日本革命闘争が本格的局面を迎えている事を物語っている。

この間の諸党派の激しい消長の過程を若干素描するならば、六七年一〇・八を皮切りとして開始された、「組織された暴力と国際主義」を軸とした「反権力闘争」は党派の政治的、イデオロギー的影響力が、プロレタリアー人民の闘いと直接結合する事により（全共闘、反戦、諸現闘etc）その本質的力学が現実の試練を経る中で、先ず六九年初頭の東大闘争を相前後する中で、革共同革マル派が戦線から脱落し、「武装反革命」への転化を遂げ、それ以後、革命勢力は、「日帝権力」、「日本共産党」、「革共同革マル派」と言う武装反革命の一大陣型と日常不断の対決を強いられる事となった。

又六七年四月闘争においては、日本革命勢力内部に於いて、革共同中核派とその政治的組織的影響力を二分して来た我が共産主義者同盟は、軍事組織建設に一歩踏み込むことによって、党の根底的危機を内包する事となった。

この「根底的危機」は四月闘争の総括を媒介としながら、一挙に党内闘争を激化せしめ、遂に、当時の党中枢の形式的指導に対して有効に対決する事の出来なかった部分は、軍事委員会および社学同を中心として無政府主義的党内闘争に突入し共産同の分裂を引きおこした。

この七・六事件は、日本階級闘争史上特筆に値いする出来事と云わねばならない。この様な中でいわゆる「共産同赤軍派」の誕生が告げられるのであるが、このドラスティックに進行した党内分派、党派闘争の中で、当時赤軍派の政治内容と最っとも固く結合していたにもかかわらず、赤軍派が最っとも色濃くもっていた無政府主義的、組織日和見主義的傾向、解党主義的傾向、特に、「軍建設を通して党建設を」と云うその組織路線を目ざとく見き、最っとも鋭く批判する事によって、赤軍派の敗北によって象徴づけられる日本革命闘争が、直面した壁の突破を「党建設・党内闘争」を軸に推し進めて行ったのが時の同盟関西地方委員会を軸とした、現在の我々の立場であった。

これ以後我々の「党建設の為の闘い」は、増々熾烈化して行くのである。その基軸になったのはいわゆる直接的には「軍建設を軸とした党建設」であり、第二次ブントの限界性の克服の為の闘いとして推し進められ、六九年安保決戦直後からはいよいよ本格化し、その事を我々は「党の革命」として推進して来たのである。

又七〇年六月闘争は、「六月決戦ブロック」を生みだし、中核派（「内乱的死闘の七〇年代」論「連続的決戦」論）、ML派（「反帝闘争」から「内閣打倒闘争」を軸とした「玉砕論」への転換）、フロント派（反帝統一戦線内の右翼日和見主義者が、おずおずと武闘派の戦列に参加しようと試みたがこれはまやかし）を「六月決戦」の「主力」に「押し出し」た。

この恣意的決戦論は、これら「三派」に種々の「遺産」をもたらす事となった。中核派は自らをスッポリと合法主義で身を固め、八派の人民戦線派への転換のきざしをつくりだした。ML派は武闘民々派への転換をいち早く成しとげ、政治的基準を喪失する事により、文字通り党組織そのものまで「玉砕」させてしまった。この中でフロント派は唯一「組織強化」を遂げた。彼等の指改派としての過去は、永年にわたる我々革命派に対するコンプレックスを形成していた。これを彼らは、この「一戦」でぬぐい去ったかの如く自ら錯覚を起し、果ては「日本革命綱領」なる「作文」までものし、更に驚くべきことには、自らの「党」的基盤を「関西ブント」の限界性の克服の中に求めるなどと云う前代未聞のオプティミストぶりを発揮し、当時我々の理論を無断で借用し、しきりと我々の「まがいもの」を流布したものである。ただ一点軍建設だけは巧妙に排除し、武装カンパニヤに力点をおき後の宮下派の一部を日向、青解と共に担っていたが、最近になってほぼ崩壊してしまったようである。これはエピソードにすぎない。

又わが同盟においても、日向、赤軍、叛旗反対派として登場し、ブント主、革共同イズムに迎合する論議が持ち上ったのちこの"六月闘争"の中においてであった。（日向派は、首都圏の学生を中心に党内に「六闘委」なるものをつくり党指導部にとってかわろうとした）。

この七〇年前半はこの様に激しい党派の分解再編が進行していくのである。叛旗、情況、共労等もほぼこの時期に革命派の戦列から脱落をとげ、愈々党派再編は日本革命闘争の核心的内容へと肉迫して行く事となった。

我同盟がいわゆる「12・18路線」の確立によって「スタ・反スタの止揚」を軸とした「体系的非法党建設」、「武装闘争再開」をかかげ、いわゆる「蜂起・戦争派」の形成を軸とした党派再編を掲げたことは、日本革命闘争の新たな局面の到来を告げるものであり、その結果、七一年四月闘争においては、我同盟を軸とした「蜂起ー戦争派」が一千名の結集をとげ（清水谷公園に、赤軍、日共革命左派、京学連等を含め）「革共同中核派」は、六条武闘を軸とした左転換を再度開始して単独の布陣をしき、青解、フロント、日向派、共労等を軸に「宮下派」なるものが最右派として形成されるのである。（まもなく叛旗派、情況派が宮下派に移り、更に七二年に入ってから赤ヘルノンポリの一部が宮下派の"戦列"に走る）。

そして我々が注目すべきは、昨秋闘争の中で、党派再編の激しい攻防は、諸党派を厳しくふるいにかけ「連合赤軍」「中核派」と「共産同全国委員会」を党派闘争の基軸へと押し上げて行く事となったのである。

七〇年代革命闘争の基調がまさに「(イ)国際主義(ロ)権力、政府問題、(ハ)非合法党建設、(ニ)共産主義政治との結合によるプロレタリアート人民の全階級闘争の統合と戦略的再編」の中に集約され全ての潮流がこれらの内容をめぐって自らの立場を明らかにする段階を迎えたという事であり、我々がいまや最大の党派性として構築せんとしている内容である。

無党派戦闘団主義を克服し非合法党建設の大道へ

ブンド党内闘争と綱領 戦略問題

現在、我々は、非合法党建設の為の闘いが、決定的な転換点を迎えているという共通認識に達している。この事の内容は、12・18路線によって開始された反スタマルクス主義に対する闘いが、そのイデオロギー的基礎の解明の段階から、愈々、国際共産主義運動の中における、我々の位置の解明を通じて、国際党派闘争の規準の確立から、綱領戦略問題に対する立場の確立を通じて、根底的転換を勝ちとり、更にその事を根拠とした党組織の全面的改組を遂行すべき段階を迎えている事である。

同盟（全国委）中央委員会は、去る三月初旬、綱領戦略問題に対する立場を、「反スタ・トロツキズムの実践的克服」の問題として提起する事により、同盟内外に、巨大な波紋を呼び起している。

それは、レーニンの綱領問題に対する立場の主体的把握を通して、同盟10有余年にわたる実践総体がどの様な傾向を持っているかという事を鮮やかに指し示すものであり、更にこの事は、かの12・18路線の到達地平がどの様な意義と限界を秘めていたかという事を、我々に深く理解させるものであった。

レーニンは、先ず第一に、共産主義運動の到達目標が、「共産主義社会の建設」にある事と、その事を軸として、最大限綱領を定式化し、更に、現実の階級闘争が、直接的には、社会主義、共産主義の内容を提示するのではなく、ブルジョア独裁が不断に生みだす、搾取と収奪と抑圧、更には、差別分断支配に対して、「民主主義闘争」という形で表現され、他方、帝国主義の他民族抑圧、侵略に対しては、民族解放闘争という型を通して表われる階級闘争に対する、共産主義者の立場を最小限綱領にまとめ上げる事によって体系づけ、民主々義闘争と共産主義運動の結合、民族解放闘争と、共産主義運動の結合を、現実のブルジョアジーのうちたおす政治内容を媒介に推しすすめ、それを過渡的方策という型で提示したのである。

この事は、反スタマルクス主義が何故に、不断に無党派戦闘団としてしか体現しえなかったのかという事に対する、綱領的基礎を明らかにするものであり、併せて、トロツキズムが一つの拠りどころとした、「過渡的綱領」主義の決定的誤りを我々に教えているのである。

この綱領戦略問題に対する我々の提起は、殊っと、野心的な内容を秘めたものであり、その事が、連合赤軍の評価に対る、提起を獲得せしめとりわけ、赤軍派の塩見、花園、八木をはじめとした、中枢メンバーが、いずれも「日本革命の戦略問題」に触手をすえている事が一定の現実的根拠を、有していながらも、赤軍派が、反スタマルクス主義止揚の闘いから召還している為に、結局のところ、無党派戦闘団的傾斜の根拠を解明する事が出来ないという決定的限界を指摘する事が出来る。

又、革共同中核派は、反帝反スタ戦略の矛盾を露呈し、その事を、先進国主義批判によってきり抜け、又、国内的には、下層プロレタリアート人民の闘いから「学ぶ」事によって一種の「貫務論」を打ちたて、更に、その事を「内乱的死闘の70年代」と呼ぶ事によって、暴動論を定式化して来たのが、昨秋11・14〜19〜24にわたる沖縄闘争までの過程である。

だが、この間、特に七二年初頭から、「組織破防性攻撃下における党建設」「人民革命軍と武装遊撃隊建設」「全国基地住民総決起集会」と云う（いわゆる立川政治）型で、彼らの戦略問題への接近の姿を示している。この事は、彼らの、反帝反スタ対戦略に基づいた、自己批判運動から、貫務論、暴動論、と云う政治表現によって、不断に無党派戦闘団に陥入り、政治的規準を喪失していかざるをえない事に対する、一定の反省を物語っている。

だが、この様な実態的対応が一定程度評価できたとしても、彼らの綱領問題に対する、立場は、依然として、反スタトロッキズムのワクを固く保持している為、現下の革命闘争の飛躍を実現する事は不可能である。

この様な中において、愈々、我々が綱領の具体的確立を通して、組織の全面的改組を推し進め、個別の階級闘争の衰れに対して、戦略的位置づけを与え、その発展の方向を、蜂起・臨時革命政府樹立の一点に統合していく為の布陣を敷く事が、決定的に問われている事を、深くとらえなければならない。

この事によって我々は、はじめて、反スタトロッキズムの実践的克服を成しとげ、現下の党派再編に綱領的基軸を導入する事によって、綱領・組織、戦略によって体系づけられたところの単一の非合法党建設を勝利的に、実現する事が出来るのである。我々は、この事によってはじめて、真マル、日共を軸とした、社会排外主義的流の、くびきから、プロレタリア・人民の革命的エネルギーを解放し、蜂起・臨時革命政府樹立へ向けて、巨大な前進を遂げる事が出来るであろう。

明らかに現下における、革命闘争の中心問題は権力闘争の陣型であり、その事は、六九年末における、中央権力闘争ーマッセンストにみられる様に、権力闘争の「質」一般の問題ではなく、明らかに、樹立すべき権力の性格を指し示し、その権力が、かかげ、実践すべき綱領の確立であり、その権力を樹立するところの革命党をいかに建設するかと云う事であり、そして、それらの綱領内容は、現実の階級闘争の中においては、プロレタリアートの諸階級、諸階層に対する階級政策として明らかにされなければならないと云う事である。

権力闘争がこれらの内容を射程におさめる為には、我々には、いくつかの、前提が要求されている。

先ほど、赤軍派の獄中組が、「日本革命の戦略問題」に、傾斜している事を指摘したが、この事の根拠は、日本階級闘争の到達地平との関連においても、把握する事が出来る。

赤軍派は、共産同七回大会における一向過渡期世界論から「高次な自然発生性」を抽象する事により、その事の具体を、いわゆる「武装プロレタリアート」の存在に求め、それを根拠として、「前段階武装蜂起」を提起した。あの「大菩薩峠事件」は、この様な論理構成を背景に持っていた事は明らかである。ここで注目すべきなのは、「武装プロレタリアート」の規定が二重に存在していたという事である。その一つは、六十年代後半の大衆的武装闘争が、全共闘、反戦、諸現闘を軸とした反帝統一戦線の中に、プロレタリアートの武装を見ている事であり、大菩薩の闘いは、武装プロを決起させる為の、党の武装蜂起として規定されていた事を物語っている。

他方、我々は七〇年三月のハイジャック闘争の根拠を見る時、それは明らかに、彼らのいう武装プロレタリアート論の今一つの表われを見る事が出来るのである。それは武装プロレタリアートの国家的規模の存在を中朝インドシナの革命戦争の中にみいだした事は、それ自体としては必然の成り行きであり、それが「国際根拠地論」へと発展して行くのである。

だが、これらの過程は「三ブロック階級闘争と国際第三潮流」という、国際党派闘争の基準が実態論以上のものではなく、結局のところ、党的結集軸が、不断に喪失していき、武闘派とか、革命戦争派という、綱領戦略的規準の決定的重要性を後景に退け、いわゆる、二派の接近から、連合赤軍の結成へと、急速に傾斜していき、無党派戦闘団的統化は極限にまで登りつめたのである。

連合赤軍のあさま山荘に於ける銃撃戦は、その様な赤軍派の大きな背景から一方では、とらえないかぎり、その根源を明す事は出来ない。彼らが「都市ゲリラ路線」と云う呼び方によって、特徴づけていた闘いは、ゲリラ型蜂起と云う様に、蜂起の問題を射程におさめ、更にその蜂起は、どの様な政治内容の実現を目的にするかと云う事から、いわゆる「日本革命の戦略問題」に行きついたと云う事は、それ自体としては、当然の結果であり、主観的には無党派戦闘団の克服が明らかに意図されている。だが、その過程は反スタトロツキズムの歴史的背景と、内在的根拠の解体と云う主体的克服の問題としてたてられない為に現実の階級闘争の中においては、反スタトロツキズムの実践的克服の為の闘いから召還する事によって、自ら反スタトロツキズムの負の遺産から、解放される事がないのである。

今や我々の党派闘争の規準は、「非合法一般」や「軍事組織一般」、「武装闘争一般」によっては、どの様なプロレタリア政治も表現する事は出来ないのであり、その綱領的、戦略的、組織的、イデオロギー的規準によって、強固に打ちきたえられた非合法党であり、軍事組織であり、武装闘争でないかぎり、プロレタリアートを蜂起ー臨時革命政府樹立へ向けた、陣型に組織する事は出来ないのである。

12・18における反スタ・マルクス主義批判の意義

六九年七、六を契機として開始された、共産主義者同盟内、党内、分派、党派闘争は、単に共産同内の問題にとどまらず、それは文字通り、日本新左翼運動十有余年の根底的総括を通じて国際共産主義運動の中に於ける反スタ、マルクス主義総体の位置を明らかにする事であり、更にそれをもってスターリニズムと反スターリニズムと云う閉じられた対応関係を根底から止揚し、世界同時革命戦略を軸として、世界党・世界赤軍・世界プロ独裁ー共和制樹立へ向けて、世界革命戦争を統合して行く為の闘いが問われたのである。

この様な、壮大な展望を基礎づけたところの内容が、まさに「三ブロック階級闘争の結合と、国際第三潮流の形成」をその実践的基軸として、体系づけたところの、同盟七回大会に於ける一向過渡期世界論であった事は万人の認めるところである。

まさに、この七回大会路線こそ、六〇年代階級闘争の基調を形成したところの内容である。そして又、この七回大会の「一向過渡期世界論」の中に、第二次ブントはもとより、六〇年代階級闘争総体の更には反スタ、マルクス主義の歴史的意義と限界が秘められていると云っても過言ではない。この遺緒と打ち続いた共産同党内、分派、党派闘争は、この七回大会に特徴づけられたところの第二次ブントをいかに止揚するかと云う事をめぐって争われて来たのである。

そして、その事を我々は12、18路線の確立を通じて、一向過渡期世界論の限界の批判を通して「世界プロ独の綱領的諸問題」の中においてはじめて世界党・世界赤軍・世界プロ独統一共和制樹立へ向けた世界革命戦争を主張する我々の根拠を国際共産主義運動の歴史的総括、とりわけスターリニズムに対する体系的把握を、レーニン死後四年を経て確立された、「スタ・ブハ綱領」の中に見いだし、スターリニズムの克服はおろか、批判すらも不可能である事を明らかにして行ったのである。この事によって我々は初めて国際路線、提起した「世界プロ独=統一共和制」の論理的、歴史的根拠を明らかにし、併せて国際共産主義運動に於ける独自な立場を形成する事となったのである。

この事はまさに、反スタ主義の一大転換を意味し、我々の共産主義運動に於ける到達目標の解明はもとより、それを権力問題を軸にして統一する事の出来る根拠を形成する事となったのである。

12・18路線の革命的意義は更に次の点において一層強固に打ち固められた。

それは、我々の綱領的立場の根拠を単なるスターリニズムの「法則適用論」に対する批判によって立場を形成するというやり方ではなく、まさに資本主義に対する原則的批判を通して、資本主義の階級の経済的基礎としての賃金奴隷制の廃絶を通して共産主義の第一段階への突入を、共産主義運動の到達目標として解明する事によって、反スタ・マルクス主義の根底的限界性（プチブル急進主義 無政府主義、解党主義、合法主義）、その醜悪ともいえる姿を白日の下にさらけだし、マルクス、レーニンの原則的立場を革命的に復権する事となったのである。

反スタ マルクス主義が過去一貫して否定的に継承して来た綱領的立場の欠如、権力問題に対する不明確さの解明は、先ず我々を最っとも強固に支配して来た、イデオロギー的基礎の解体の作業から開始され、その対象として宇野経済学、黒田主体性哲学、トロツキー政治理論の批判として解明する事となったのである。

スターリンの法則適用論は、「一国社会主義建設可能論」および「社会主義経済法則」として体系づける事によって民族共産主義、連邦共産主義を根拠づけ、それを「スタ・ブハ綱領」によって世界革命綱領にまで高め、国際共産主義運動および全世界のプロレタリアートの運動を全面的に支配し、ロシア革命の防衛から、更に民族的利害を一切のプロレタリア的利害に対して優先させると云う一大体系をつくり上げる事となり、これに対する様々な批判が開始された。「堕落せる労働者国家」を主張したトロツキーは、決してスターリニズムを根底的に解体しうる内容を提起しえたとは言えない。

国際的にはトニー・クリフ、あるいは日本に於いては対馬忠行、黒田寛一をはじめとして、スターリニズムに対する批判が開始され、これは、いずれも「ソヴィエト社会論」として体系づけられ、ソヴィエトを軸とした国際共産主義運動に対する綱領問題を軸として展開されたものではなく、ことごとくソ連社会の実態の内部にのめりこみ、その中からブルジョア的残滓の摘発によってスターリニズムの批判が試みられたのである。だがこれは、スターリンの「社会主義経済法則論」それ自体に対する批判たりえたとしても、決して諸々の「ソ連論」者達に革命的位置を約束するものではなかった。何故かというならば、ソ連社会の内部にのめりこんで、ブルジョア的残滓の告発をする事は途方もない見当ちがいであり、それは明らかに「社会主義建設可能論」や「一国社会主義経済法則論」の誤りの極端さに幻惑された、一対一的対応の結果である事を知る事が出来る。むしろソ連社会に経済法則が作用しているとか、ブルジョア的残滓が残っているなどというのは当然すぎるくらい当然の事であり、この事自体はスターリンのみの為せる技ではないのである。もしもその様にスターリンのみにその根拠を求めるとするならば逆にその立場はスターリニズムに影響されなければ、一国においてもブルジョア的残滓を払拭して、いわゆる「一国社会主義建設」は可能であるという事をその内部に秘めている事を意味する事になってしまうのである。

それはまさに、ソ連社会におけるブルジョア的残滓の有無でなくて、あくまでスターリニズムとして体系づけられた世界革命綱領が国際共産主義運動、全世界プロレタリアートの闘いに対して、どの様な政治的役割を果しているかという事こそ基準にされなければならない。結局のところ諸々の「ソ連論」者はことごとく、スターリン同様の一国社会主義論者である事を物語っているのである。

革共同革マル派の「ソ連論」が結論的には「ソヴィエト社会政策論」に帰着せざるをえないという事は故なしとしない。

この様な中に、宇野弘蔵は独自な「資本論」解釈と改作によって、一つのプチブル経済学の一大体系を確立する事となるのである。

宇野弘蔵は資本主義社会の分析を「資本論」をよりどころとしながら、「資本主義社会の経済法則の解明」という立場から、法則としての「完成」に自己の独自な任務を設定し、「資本論プラン論争」に対して、いかにも強引に決着づけようとしたのが「経済原則ー経済法則」論と「原理論ー段階論ー現状分析論」として体系づけられた内容である。宇野はこれらの作業を「学的体系化」と「資本主義に対するプチブル的反発」とスターリンの「社会主義経済法則論批判」および日本における「講座派・労農派」の歴史的論争に対する一つの決着として提起したところに彼の歴史的位置を見て取る事が出来る。

特にその核心は宇野の場合には資本主義社会の基本矛盾を「労働力商品化」に求めた点にある。つまり宇野は、「人間は、働く事によって自らの生計をたてる」事は人間社会においては、自然必然性であるとして、その事を宇野独自の「経済原則」という概念によって規定し、「経済学」（宇野流の）の射程外におき、経済学の対象領域を「経済法則」として定め、更に宇野は、その中で「労働力商品化」を資本主義社会の基本矛盾としてとらえ、ブルジョアジーのプロレタリアートに対する支配を労働力商品化から基礎づけたのである。その結果、資本主義社会における階級支配の本質としての「賃金奴隷制」を暴く事の出来ないプチブル経済学を体系づける事になったのである。

したがって宇野経済学はいわゆる「労働力商品化」に対する告発は出来たとしても、労働制度の廃絶を目ざした共産主義運動の第二段階への突入をもって、共産主義社会を解明する事の出来ない経済学であり、結局のところ政治的には、スターリニズムと同一の地平にしか立ちえない、反スタ経済学でしかないのである。（イズム14、15参照）

黒田寛一も宇野労働力商品化論を根拠にしつつも、宇野経済学の哲学的側面の欠如を批判する事を通じて、いわゆる宇野がふみこむ事のなかった疎外論の領域にふみこむまではよかったものの、それを「疎外された労働と疎外されない労働」と云う概念対置の図式にはまりこむ事によって「主体性唯物論」の思弁の世界にのめりこみ、「疎外革命論」を体系づける事となったのである。これ又結局のところスターリニズムを止揚する事の出来ない、革命論であり、プチブル的反発でしかないのである。この様な批判を通して我々は、資本主義批判をその根拠にまでほりさげ、労働制度の廃絶を軸とした「共産主義論」を確立する事が出来たのであり、この事によって第二次ブントがもっていたところの党形成ー階級形成ー二元論批判の根拠、及びその事を通してブントがもっていた権力闘争一元論的傾向、戦略戦術主義、無党派戦闘団的傾向を克服する論理的根拠を明らかにし、「党派闘争ー党建設」の意義を解明することが出来たのである。

ソヴィエト主義批判は以上の諸点をふまえないかぎり根拠のないところのものになるのである。

我々が、12、18において、この様に反スタ・マルクス主義のイデオロギー的基礎の解明を通して、スター反スタの止揚を根拠づけたところに日本新左翼運動中における独自な位置があるし、ここにこそ、我同盟の決定的優位性がある事を深く確信する必要がある。

確かに、宇野、黒寛、トロツキーは、スターリニズムに対して多くの批判を試みながらも、それが一対一的対応たるが故に、結局、政治的基準においては、スターリニズムのワクの中にはまってしまい、たかだか、スターリニズムの修正にしか帰着しない内容である事を我々は12・18において明らかにして来たのである。（イズム14号、政治局論文参照）。

六月闘争の任務

（一面より続く）

六月闘争は、以上のわれわれに問われた壮大な事業を果すにあたって決定的な位置をしめている。

われわれは、とりわけ現在、五・一五「返還」後の諸党派の無方針ー階級闘争の「ある種の空白」とでもいうべき傾向が社民ー人民戦線派への屈服であることを大胆に暴露しそれと闘いぬかねばならないし、他方、問われた事態を直感しつつも「党と革命勢力の強化」「全人民の武装化」の思想と蜂起の必要」の宣伝一般にとどまっている諸君に対しては、まさしくその内容こそ問題であり、その為に何を準備せねばならないのか、を理論的実践的に示すことによって非合法党建設の巨大な奔流の中にまきこんでいかねばならない。

五・一五以降の事態は、日米帝国主義者の野望を余すところなくますます赤裸々に示している。密約基地にはB52爆撃機が飛来し沖縄の全基地はベトナム行き米空軍機への燃料補給から米兵の出撃訓練にフル回転し、本土の米弾薬庫からは弾薬輸送船がベトナムへ向い、横田基地では戦車が修理され直送されている。この真只中へ自衛隊派兵こそ基地を日帝が「防衛」し、沖縄全島を「防空圏」に組みこむことによって民族解放闘争に対する最前線を形成し、日米「韓」台反革命体制を一層強化していくものに他ならない。

このもとに、米軍基地機能を維持したままでの全軍労への七千名の首切り、土地強奪をはじめとした日帝独占資本による沖縄経済の制圧ー首切りと失業者の増大等の、「復帰合理化」、通貨交換における収奪、物価値上げetcの沖縄人民への差別分断支配の一層の強化が進行している。

かかる帝国主義者の攻撃の前に沖縄の階級闘争は、新たな分解と再編を迎えている。従来の復帰運動を支えた諸勢力とその戦闘性は上層労働者ー下層労働者と農民への分解の兆しをみせ、急進な「本土一体化」が進行している。この分裂に楔を打ちこむべく我々は沖縄人民の「復帰合理化」への闘いー民主主義闘争、反戦闘争と固く結びつき、その闘いを自衛隊派兵阻止ー米軍基地解体の革命的政治闘争と結合して発展させなければならない。これらの闘争を媒介としつつ沖縄ー本土を貫く真紅の国際主義の潮流を闘いとっていこうではないか。

六・一五闘争はかかる闘いの新たな出発点であり、緊迫した出入国法粉砕を軸とした入管闘争、九月結審粉砕にむけた狭山差別裁判六月公判闘争と結合し、民主々義を闘いとる単一の全国闘争としての発展をぜひともかちとっていかねばならない。同時にわれわれはその中での革命派の任務を大胆に提示し蜂起戦争派の到達地平を全人民の中にうちこみ、その飛躍をかちとる唯一の部分であることを責任をもって示すであろう。

共産主義者同盟(全国委)機関紙
「烽火」
毎月5・20日発行
定期購読料
(〒共)20回分　一、五〇〇円
30回分　二、〇〇〇円

保安処分戦線は拡がり探まる

十全会系病院解体へ300名
「精神障害者」虐待を告発
5.28京都

愚者会、家族会先頭に
二十数団体が決起

全国で、刑法改正・保安処分新設粉砕の闘いを推進している同志諸君！

5月28日、一週間に渉る市内ビラまきと、（京医労等労働戦線への情宣も含め）昨十一月の第一波闘争に続き、第二波十全会系病院解体闘争が様々な団体の圧倒的な参加の下、貫徹された。

我々は、この間に12・5保全共結成大会―2・26全国大会、27第一波法務省デモ、更に、全国八ケ所での対刑法改正粉砕闘争、法制審粉砕闘争と全国的な結集の下に闘かい抜き、その理論的集約と更なる深化を組織破防法体制と真向から対決している破防法―RG裁判闘争との密接な結合の下に、4・14「刑法全面改正策動、破防法―保安処分と闘かう東京大集会」の圧倒的な成功へと結実させていった。それは、敵権力刑法全面改正策動が一般的な"近代合理主義"の貫徹という次元を越え、市民社会未端すみずみ迄の官僚的、警察的独裁を企図するものである。ヴェトナム民族解放闘争を中心とする世界的な革命的人民の闘かいの勝利的前進、反対に後退どころか増々泥沼に引きずり込まれる米帝、更にその肩代りからアジアの盟主への野望を露骨に示し始めた日帝の侵略反革命戦争進行体制の発展として国内治安管理弾の強化（アパートローラ作戦等）が"過激派"の市民社会からの"追放"を一定成功させ、それだけでなく自己テロル、無差別逮捕等を通じ、革命党派と人民との接触を不断に切断せんとし、又、その管理体制は、あらゆる「反社会性分子」の抹殺―隔離収容へと徹底強化されんとしている。

我々は現在の日本階級闘争の到達地平が、歴史的には、その運動の断片すら登場させなかった精神病者を初めとする全ての「障害者」の政治過程への（自然成長的な色彩が濃い）登場をもたらしつつある事を知っている。それは政治の先端での人民の闘かいが激烈であればある程、最も差別され抑圧されてきた部分との連帯が、かちとられるという事の証左でもある。

この5・28闘争は、直接的には京都で最大の病床数を持つ十全会系（双ガ丘、ビネル病院、東山サナトリウム）で起った患者虐待（不必要なベッド拘束3週間、電気ショック、更に薬物過剰投与による致死事件）に対する「告発」を一般的な悪徳病院キャンペーンに終らせることなく、起訴をしぶる検察側を追いつめ、裁判へもち込む事、又、京都医師会のボス的存在十全会の厚顔破レン恥な存在を黙認、選挙とひきかえに保護さえしている鈴川エセ民主府政の徹底暴露、更にこの闘かいを通じて精神病者狩りをなんの痛痒もなく行なっている地域社会へ、それと対決する地区精医研―保安研―地域家族会―患者会等を創出していく意味で提起され、かちとられたのである。当日は、府医大教養部に、同志社全学闘―保共闘連の30名の隊列を最大部隊に、京都地区荒軍、洛北戦線、立命L戦、京大C戦、現法研、M闘精医研、文保共闘、府医大保共闘、関西精医研連、医学連五条山共闘、産大育人問題研、花頭大差別構造研、京教大精医研、医学大障害者解放研、家族会、患者会、精神科医共闘、精神科看護者共闘、京医労岩倉病院社会福祉関係労働者等別名の大部隊が結集し、京都地区保共闘事務局の基調報告「悪徳病院―精神医療告発から始まった十全会系解体闘争が、今や明確に精神医療の現在的内容から精神病院解体―地域治安管理体制解体闘争として打ち抜かれねばならないこと、又、蜷川エセ民主府政の犯罪性の徹底暴露と、それとの対決、順応型社会復帰論（差別抑圧構造と対決するのでなく、それに甘んじさせる傾向）との対決をかちとりつつ、この結集力を、検察庁へとつめ上げていこう」と提起を受けた。続いて、ほぼ全参加団体から基調を豊富化する発言を受け、沖縄闘争を貫徹した洛北戦線からは「刑法改正―保安処分新設粉砕の闘かいは、将にありとあらゆる反社会性分子抹殺攻撃との闘かいであり、革命党派は、この闘かいを通じて、今まで以上の深さと拡がりをもった差別抑圧構造解体の内実が問われており、正に従来の精医研運動を乗り越え、権力闘争の一翼として闘わねばならないこと、この保安処分粉砕闘争の最先頭に立って闘かう」事を決意表明。精神科医共闘からは、「岩倉病院暴露の中で、主体的に患者組織が、病院長団交をかちとり要求を貫徹した事にも見られる様に"患者の解放"が労働者の闘かいと結合する中でしかかちとられないのだという事を萌芽的に示す画期的な闘かいであること。又、京都の地では企業―病院と、役所―保健所、福祉事務所等との癒着―"民主"蜷川体制とそれを補充する日共、医師会等との対決を」と、発言。最後に関西保共闘から「この間の法制審や刑法学会を見ると精神衛生法改正による迂回路線よりも、正面突破に満々の自信を権力側は示している。我々は、これと全面対決していく方向で、本日の闘かいを貫徹しよう」と提起をうけた。

集会の後、双ガ丘ビネル病院へ向け終始戦闘的なデモ、又病院前では、30分間坐り込みを貫徹、病院の鉄格子と"防弾ガラス"の間から患者さんが熱い連帯のマサインを我々のデモ隊に送っていた。

朝日、赤旗の差別記事を徹底糾弾せよ

総括集会後、この間悪質な「精神病者狩り」キャンペーンをしている朝日新聞京都支局へ差別記事糾弾の闘かいを展開したことも合わせて報告しておく。

「労働者の新聞」赤旗5月23日号に、アル新以上の露骨な精神病者に対する差別記事がのっている。

―大阪で二十一日、ノイローゼの男が自宅に放火、隣人ら四人に重軽傷を負わせた事件があり、これが、二十二日こんどは（またまたといいたいのか？）京都府下で精神異常者が包丁を持って大あばれ、自分の親や通行人四人に重軽傷を負わせるという事件が発生―という内容・みだしは「精神異常者あばれ四人ケガ」であるが、こうした赤旗の書き方は、現下の精神医療問題に対する無知を示して余りある。

第一に、アル新でも患者の名前をふせているところがあるのに実名をのせていること。

第二に、精神異常者とは、何たる書き方か！　労働者内部から生みだされ、差別され、抑圧されてきた人々を擁護するのではなく、精神病患者は危険であり、事件が続発しており、恐ろしいことだというキャンペーンをはり。何故彼らが、そうせざるを得ないのかという根本的原因を探ろうとしていない。"労働者人民の味方"を自称する「共産党」が、事実はこの「赤旗」報道にあるように、差別する側に加担しているのだという冷厳な事実は、闘かう人民より徹底して糾弾、解体されねばならない。

我々は、アカハター日共の犯罪性をトコトン追求するであろう。

国営暴力団を許すな

検察さえ特定せざるをえなかった久留島同志暴行犯人は、次の七名である。彼らをさがせ、一瞬たりとも追求の手をゆるめるな

麻植岩男（天満署警備係長）、松本光生、仮屋薗勉、鈴本正視、長場義堅、河喜多享、末安卓雄（天満署交通課）

共産同と共に闘う医学連―5・15闘争

5.22～25 法制審、刑法学会を糾弾
保全共 首都で緊急行動

【5月22日】

穏密裡にしかも、やみくもに在野の反対の風をふりきり、刑法全面改正に突き進む権力は、保全共に結集する関東の同志中心に、緊急行動を貫徹、法務省前で、シュプレヒコールとデモ、ビラまきを貫徹。

法制審はこの二回目から、条文等を含めて実質審議を開始。その方向性は(一)「刑法改正の必要の要否」という刑法成立の根底問題を素通りし、前提法相の迅速審議の恫喝の前に草案内容の個別討論を先行させる。(二)にも拘らず反対意見等の採決は個別に行なわず全体の検討が終った後で、一括採決、その後、改正の要否について採決するという内容である。この間我々の保安処分を中心とする刑法改正反対闘争の全国的な拡がりにより、一方において、限界はあるが大阪弁護士会、日弁連等の反対を引き出している。この様な人民各層から広大に起ってきている反対の声を一切圧殺し、小野清一郎一派―法務省の野望をなにがなんでも押し通そうとしているのだ。審議の方間は、各則の法律的側面にしぼり、一方で予想される個別条項への反対は一括採決により、法律の全体の体系性の尊重という名の下に圧殺し、一挙的に組織破防法体制下の治安体系を貫徹せんとするものである。

同志諸君、スピードの加速度的に連まっている刑法改正への道程を断乎阻止しよう。

【5・24～25】

昨年10月の保全共（準）の歴史上初めての刑法学会への突入以降、今回の刑法学会の主流はその総括を、厚い機動隊と私服の壁とで答えた。

一日目は会場の神田学士会館前でアジテーションとビラまき、二日目の刑法改正全体についての審議に焦点を合わせ五〇名の部隊で初めからの実質的な傍聴をかちとった。我々は、刑法学会闘争を闘かう。

5.28京都

第9回RG裁判
大阪府警―地裁一体のRG弾圧を追求
裁判官児島 白色テロを公然と弁護

五月二十日午前十時、大阪地裁第五号法廷で、第9回R・G裁判が開かれた。被告団は、七一年一月二十五日、大阪地裁で開かれた第2回RG裁判に出延しようとした被告団と傍聴人等に対し、天満署員が、裁判所に乱入し、久留島被告をはじめとして数名に対し、なぐるけるの暴行を加え、出延を妨害した事件の不起訴を追求し、裁判所の警察に対する屈服、加担を暴露した。又警察の日常的な白色テロルの実態を暴露したところ、裁判官児島は、この白色テロルを弁護する発言をし、警察・裁判所一体となった、弾圧体制を、おく面もなく自ら暴露した。

五月二〇日午前十時、大阪地裁第五号法廷で、第九回RG裁判が開かれた。公判廷で、我々被告団と傍聴人は、今や日常化された敵権力―政治警察による「非合法」弾圧―白色テロルの実態を暴露し、これに対する裁判官の意見を問いただした。裁判官児島は破廉恥にも、「このようなことは、よくあることです」といってのけた。さらに、被告人久留島同志に対する大阪地裁内における大阪府警天満署員の暴行の不起訴を問い正したところ、「私の意見はすでに述べているので言いません。あなた達の意見はよくわかっています。付審判請求もでていることですし、その成り行きを見ます。」といけしゃあしゃあと述べた。

この「天満署員による暴行」の不起訴とそれに対する裁判所の対応は、まさに権力の支配の本質をもっともよくあらわしている。まずこの事件を再度ふり返えってみよう。

七一年一月二五日、大阪地裁で開かれた第二回RG裁判に出延しようとした被告人と傍聴人らに対し、大阪府警天満署員が、裁判所内に被告人らを追いかけて乱入し久留島被告を初めとし、数名に対し暴行を加えたのである。これは裁判所より召換を受けた被告人に対し、警察官によって加えられた全くいわれない暴行であり、単なる警察官による暴行事件（これ自身極めて重大なことであり、ゆるすことのできないものである）のみならず、「裁判所において公正な裁判を受ける権利とその傍聴を保障（憲法三二条、八二条）された国民の権利裁判の独立」という形で巧妙に作り上げられた支配形式（＝裁判）を権力自からの手で打ち破ったことに重要性がある。ここにあらわれたことは、まさに権力に対して最もよく闘う者、真に国家権力の根底をゆるがす者には、支配者は自らの支配形式を破棄し、自らの支配の暴力性を明からさまにしても弾圧するのだということを示している。これが本質なのだ。

不起訴決定直後の記者会見で検事は、つぎのようにいっている。「警察官による暴行はあった。それは被告人、裁判所の官吏のみならず、居会せた公判立合検事らの目撃ではっきりしている。目撃者は、被疑者の警官を一度しか」現場で見ていないので完全には確定できない。しかも被疑者は全員犯行を否認している。それゆえ、嫌疑は不充分であり、不起訴とした」。これだけの事実があれば、我々の場合、起訴はもちろんのこと、確実に有罪になる。まさにな

にをかいわんやである。悪質深い検察さまよ！

これだけ天満署員による暴行がハッキリしていて、なおかつ、「裁判の独立」の破壊を承知でゴリ押し、居なおるのは、久留島同志らがRGの闘士であることへの権力の報復である。69年末から70年にかけて闘い抜かれたRGの闘いが、「山田弾薬輸送列車阻止闘争」「寝屋川反レバ闘争」「強制取奪闘争」のどの闘争の一つを取っても、それ自身、権力の支配構造を根底からゆるがすものであり、それら全てを党に組織された軍事組織によって遂行されたこと、ここにこの闘争の最も革命的な意義があり、国家権力―アルジョアジーが最も恐怖する由えんである。そしてこのことを踏えるならば、今回の「司法の独立」という重要なアルジョア支配様式を自らの手で破壊してまでも行われた弾圧の意味が、その本質が明確になってくる。さらに、裁判官児島が事件発生以来、我々の追求の前に"「司法権」に対する「警察権」の挑戦であり、裁判の進行と切り離せない"としてきたにもかかわらず、今回の「不起訴決定」に対する無視するというまでの児島の態度は、「司法権の独立がまったくの欺瞞であり、決定的な時点では、その本質が暴露されることを示している。

今までの付審判請求は、警察の横暴とそれを保護する検察を追求するべく行なわれてきた。このことは重要なことであり、その重要性は、いまのように国家権力の暴力装置が肥大化し、政治警察の弾圧が「非合法化」されてくればくるほど増してくる。

これらの付審判では、あまり明確には「司法の独立」にはふれられることはなかった。しかし「独立」であるべきはずの司法機関がこれらの付審判請求を却下することで、その「独立性」の欺瞞性があらわになってきている。たとえば、それは博多事件に対する付審判却下に表われている。

今回の付審判は、それ自身「司法の独立」といわれている基本的な支配形態が問われているのであり、その欺瞞性が明らかになるだろうし、我々は断乎として明らかにする。

以上の内容で付審判を貫徹するとともに、このRG裁判でも断乎として追求しつつけると被告団から決意表明され、この決意を受け止め断乎として共に闘うことが意志統一され、第九回RG裁判は終った。

国家権力の暴力をゆるさず、断乎として反撃せよ！「司法権の独立」の欺瞞性を暴露せよ！付審判請求に勝利せよ！RG裁判勝利。

'69中電マッセンスト戦士達に報復「判決」
5・20大阪地裁 佐渡氏ら六名に

日本階級闘争史上、とりわけ日本労働運動史上、画期的な地平を切り拓いた、69年秋大阪中電マッセン・ストライキを先頭を切って担い切った同志達に、五月二五日朝、大阪地裁で、「判決」があった。

「判決」は、69年10・11月の佐藤訪米阻止闘争の政治的意義を理解せず、いや理解しようとせず、彼らの行為のみを独立して裁き、検事のいい分をほぼそのまま認め六同志を有罪としている。まさに佐渡同志をはじめとする同志達の行動に、政治的行動であり、彼らの政治的主張と無関係でないだけでなく、絶対に切り離すことはできない。にもかかわらず、支配者―アルジョアジーは、行為を（プロレタリア）政治と切り離すことでアルジョア政治を貫徹している。実行行為のみを独立させて裁くことが、彼らにとって重要なのであり、決定的なのである。

このことはこの判決の次の点にもっとも明確に表われている。

大阪中電局員であれば、誰れでも自由に使用できる中電檢査（ここで当時、連日、政治集会が行なわれていた）で、佐渡同志が「安保粉砕・日帝打倒、世界革命戦争勝利」「佐藤訪米阻止、帝国主義的中電解体」「中電マッセン・スト貫徹―北大阪制圧」闘争に決起せよ！と呼びかけたことが、「建造物侵入」にあたるとして、有罪にした。この理由の中で、誰れでも自由に出入りできる場所への立ち入ることは、建造物侵入にあたらない、としつつも管理者の制止行為があれば、建造物侵入にあたるとしている。

中電当局の制止行為が、「立ち入り」に対するものでなく、佐渡同志の正当な政治的行動に対する制止であったにもかかわらず、その制止の不当性を問わず、逆に、「立ち入り」の制止だとして建造物侵入を有罪だとしている。これから明らかなように、この判決は単に政治的背景・意味と実行行為を切りはなすことで、思想、心情を裁くのみならず、直接に69年秋に煮つまったプロレタリアートの政治を有罪だとしているのだ。アルジョア階級裁判とはこのようなものだ。

このような反プロレタリア的判決を出した児島も、この建造物侵入に対しては、さすがに被告・弁護団の追求の前に、検事のデッチ上げを認め無罪とせざるをえなかった。

中電マッセン・ストライキは、96年秋の安保決戦を確定づけた首都制圧闘争、北大阪制圧闘争と並んだ三本の柱であった。中電労働者は安保粉砕・日帝打倒、帝国主義的中電解体、の戦略を一歩も妥協することなく全プロレタリアート人民の前に提起し、それを無期限ストライキで貫徹した。この闘いは、全国の反戦労働者をはじめとする反帝部隊に空前の反響を呼び起し、明確に、96年秋の階級闘争を戦略的に牽引した。

首都制圧に呼応した北大阪制圧闘争に二万余の戦闘的部隊を総結集せしめたのみならず、権力―公社―民同をはじめとする諸政治へ、ゲモニーが、このマッセンストに対しては戦略的な全国政治としてしか一切対応できないことを自から認め、あの中電に対して未曾有反革命暴力部隊の配置を軸として全面的な戒厳体制をもって答えざるをえなかったのである。

あの中電労働者こそ、革命闘争時代の到来を自らの身をもって全プロレタリアートの名において高らかに宣言し、階級闘争史上、不滅の金字塔をうちたてたことをはっきりと確認することができる。

だが、われわれに問われたのはそのような革命的決起に応えるべき、権力との全面にて武装対峙状況の形成と、その示された革命闘争の新たな型を革命的左翼の全ての部隊によって受け継ぎ、担うことであった。

これ以降、展開された共産同の党内―分派闘争は、まさに問われた武装、軍事を担う革命党をどのように建設するのかをめぐって闘われたのであり、七〇年一二月一八日の日向派の追放で、そのような党の原則的立場を確立し、七一年一〇月の赤報派との分裂は、日本革命戦略を確定し、全面的な軍事を担いきる体系的非合法党をつくるのか、それとも党を軍に解体し、プロレタリアートを全面的に権力に組織することを放棄するのか、をめぐって闘われた。我々はいまや日本革命戦略を確立し、全面的なプロレタリアートを組織する段階に到達している。会労者諸君我々は必ず勝利する。

学園闘争を組織破防法体制下の権力闘争の一翼へ再編せよ
（3）洛北戦線の組織総括的提起

はじめに

昨秋闘争以降、六九年敗北後の二派―八派の解体状況が、七二年沖縄返還から派兵へという日帝のアジア侵略反革命と全面対決する街頭武装闘争の復権の中ではっきりと潮流的に二分解し、その革命的翼をさらに、武装闘争により党的再編することと、半合法大衆軍団―戦略部隊へと改組する事が我々学生戦線にも問われている。昨秋一一・一九闘争は、まさに七〇年代組織破防法下の権力闘争を組織しうる体系的非合法党への飛躍と、日帝のアジア侵略反革命の野望を打ち砕く闘いとして、同盟の総力をあげたい闘いとして、我々学生戦線にもそれをいかに担うかというつきつけとして闘いが提起され組織されていったが、我が洛北戦線のかかわり方は、一般的政治的意志統一しかなされず、組織的獲得目標が設定されず、個人の飛身も組織的なものとして獲得されなかった。その後の集約過程において出されたような問題提起を組織に還元し、蓄積していく方向性をとり得なかった。それを蜂起―臨時革命政府を実現する単一非合法党建設に、大衆戦線を体系的に組織していく政治基準の設定と組織的獲得目標の明確化をなし切る中から解決していく必要があるだろう。

我々の限界と飛躍への苦闘

70年9月に結成された洛北戦線が初期のバルチ的傾向（赤ヘル・ノンセクトの組織論抜きの軍事への偏景）と、古い体質の克服を、組織的に保証し切れなかった（個人と闘争という解党主義的傾向）決定的限界性を有しつつ、71年9月以降、京学連内のBUND系大衆戦線へと、党＝BUNDに結集していった過程でのあいまいさ（政治的基準のなさ）と、それが××名の細胞建設からなされたという点をも密に総括する事から、蜂起・戦争派内のBUND系独立諸グループの解党主義的傾向と、戦闘団主義、中間主義を止揚し、単一非合法党の一翼へと、組織しうる足がかり、とりわけ、京学連の我々の手による再編をなす事ができるだろう。

結成当初、党―軍―統一戦線の一翼を担うべく、自らを位置付け党組織論を、大衆戦線へ横すべりさせ、一定程度党の問題に答えようとしたが、決定的限界は、その頃全党派に存在していた軍事主義を路線化したことである。すなわち、帝軍解体をスローガンに運動を構築していったが、全共闘運動の敗北の総括を、軍事一般としてしか、問題をたてきれなかった不十分性を内包していた。

実際の大衆運動を継続的に組織し、闘いだしたのは71年4月からであり、蜂起・戦争派の基準と、京学連への結集軸を明確に設定できないまま、4・6月闘争を、その旗の下に闘い抜いていったのである。そして、現下の階級闘争で問われている問題＝軍事を組織する党の問題を、69年の敗北を単なる軍事面での機動隊の一日軍政への敗北―官僚的警察的独裁を許した―ということだけでなしに、また、我々の階級闘争への関わり方―綱領獲得と樹立すべき権力の内実の獲得へむけた、我々の闘争の組織化の内容＝階級政策の鮮明化また階級闘争の構造的転換を主体の飛躍として、闘いを組んでいったのではなく、提出された政治集団へどう答えるかでなされていった。

組織面における我々の基準は、京大C戦線の運動＝共闘からの組織建設に対し、洛北地域の北部五大学を単一戦線へと組織することで対峙し、6月の全学バリストの成果を5大学の書記局の強化として、運動実績からの批判を開始した。しかし、この組織化も、個別政治課題を一つの戦線で担い共闘するのでなく、（とりわけ日共への力の対峙として、単一戦線を考えていた）、重層的に担い、それを体系的非合法党建設と綱領獲得へ向けて組織しうるまでに至らず11月闘争へなだれ込んだ。11・19闘争を5大学で闘い抜いたわけだが、その成果を蓄積し、さらに強固な組織化へとならず、5大学の連絡会議―書記局の機能は低下してしまった。

とりわけ府大においては、9月以降明確な指導体制を提起しつつ個人と闘争の枠内からしか"機能の分散"を組織として保証できず意志統一と、政治討論を保証できなかったために、又自治会の運動の実績をどう獲得するかに埋没し不断に大衆運動に解体され、階級闘争の真只中に位置付ける視点をもちえなかった為に分散化していったと思われる。洛北戦線をいかに党に体系的に組織し、その基準から活動を点検していく作業をなし切り、党の運動を実体的に表現していく必要があるだろう。蜂起―臨時革命政府を実現する党建設に向けて、階級闘争をいかに押し上げていくのかを、政治闘争を権力闘争にまで高め上げるその内容を、我々の運動実体で築き上げる組織的密集体制の確立と、政治基調の獲得を早急になし切らねばならない。

一一・一九闘争に到るまでの、六月全学バリスト闘争の成果を踏まえ、九月三重塚闘争一〇、一一月沖縄闘争と学内での日共、学校当局への闘いは、スト、学長室占拠闘争、学生部長―学長団交等、府大闘争史上の最高形態―封鎖、（六九年全学闘時代）より、有効かつ、高度な質的な闘いとして闘い抜かれたが、その成果の一切を戦線の蓄積と、強固な打ち固めによりC戦線―同大全学闘の"大国政治"への明な党派性のある部隊として、建設されていかなかった組織体制―指導体制の総括をこの間一五・二一の闘いへの主体的かかわりの中から一定なしてきた。それは、二、三月の総括を経て、四月再出発せんとした我が洛北戦線が、結局、七二年四・二八闘争までの過程で再度失敗し、しかし、現実の沖縄闘争の要請に応え主体的に闘い抜いた部分を中心に、五・一五首都、二一旗本現地での阻止闘争を闘う中で、そもそもの出発からの総括と、無党派戦闘団に対する党的な解体の基準を獲得し、（とりわけこのことは、五・一五首都での沖縄返還式典粉砕闘争を闘うにあたって問われた。）そういった京学連の運動に対し、単一戦線を提起して来た我々の運動の実践的総括、組織化の問題を、府医大、産大等の諸君の結集を軸に、日共、京学連に対しうる潮流を形成し、学生戦線の再編の最先頭で担っていける部隊として、第二段階の建設にとりかかっていったのである。

無党派動揺分子を解体し、京学連を党の指導下に打ち固めよ

その総括の中で明らにしてきたのは、まず現在の階級闘争の到達地平をいかなるものとしてとらえその根本問題にいかにして答えていくか、という問題であるだろう。それは、69年秋の敗北を街頭実力闘争の爆発により、蜂引されて進んで来た闘いが、反政府闘争から権力闘争へと進展してきた。日本階級闘争の構造的転換に、新左翼総体が答え切れなかったこととして我々がとらえ、その7・6赤軍派の提起した"軍事と党建設"の問題を京大レーニン研はそれのみを横から総括し、その走軍派の提起した問題がさらに、叛旗、情況日向派との党派闘争として結果した第2次Bの総路線を総括せず、（BUNDの継承性の問題）いわば、その第2次BUNDの理論主体としての政治過程論、といわば革命的戦術の内容から総括し、現在の階級闘争を把握しようとする点である。それは、結局、現在の党派闘争の環が、この軍事問題と69年以降、日帝の侵略反革命戦略の全面展開のもとで新たに、自然発生的な闘いとして広汎におこって来ている下層プロの"民主々義を闘いとる運動"を党的に統合する点をめぐり、さらにそれを蜂起に向けて系統的に組織することとしてあるが故に、階級闘争の根本的利益の問題としあることに一切無自覚に、原則なき暴力的党派闘争主義反対と、念仏の様にとなえ自らは中間主義的―解党主義的態度で、階級闘争を論評するという小ブル観念論者にしかすぎないことを見抜き、我々は、彼らには、69年秋期安保決戦の敗北の総括とこの間の連合赤軍への彼らの総括にみられる、社民的傾向―武装闘争（銃撃戦）支持の内容＝いかなる態度でそれを言うのか（一般的に支持するだけなのか、現在的には出来ないが、将来のため準備しているのか）をつきつけて、その上で政治路線上の総括を要求する必要があるだろう。我々自身も、結成当初から、さらに、実際の闘いを、大衆運動を指導して来た実践的総括をふまえつつも、なおかつ、戦闘団主義的に、軍事の問題をとり扱い、それに基づく政治組織路線しか提起できなかった点を、その、敗北を、軍事と、権力問題としておさえつつも、主体の問題まで、総括し切れず蜂起一般はスローガン化しても、それに向けた系統的階級政策を政治的民主々義闘争を綱領―戦略を軸に、提起し具体的な大衆運動のスローガンとして、実体化させていけなかった点については、深く総括する必要がある。

又、さらに、我々は蜂起・戦争派に結集し、自らを蜂起を担う大衆戦線の一翼として、蜂起の陣型を構築してゆく活動を、叛軍闘争＝帝国主義軍隊解体、革命軍創出として、攻撃的叛軍闘争を実機に京学連動を担ったわけだが、しかし、レーニン研は4・28日向派との党派闘争での関観的態度を総括しきれず（すなわち、BUND内党内闘争としてあるのでなく、軍事と党建設といういわば階級闘争の根本的課題を巡るものとしてあることの……）それ以降も、なお中間主義的態度で、12月の日向派の武装襲撃にはおかむりし、昨秋闘争以降の潮流的分裂が、何を軸に開始したのかに対する無自覚性無内容な提案の提出等によって、彼らは現実に起こりつつある、革命的翼内部の、党、蜂起、の革命の根本問題を巡る党派闘争に対し一切評価できない為、例えば、中核派に対する批判として「彼らは運動の基盤を持っていないから、大衆に対し我々が勝っている」とか、「単なる党の指導内容の問題は、大衆闘争の次元では問題にならない。」などという、大衆意識まる出し（それも京大教養部生としての）のハレンチな言辞等がとびだすのだ。それはボルシェビキ通信6号の主張論文「我々は、『日和見的翼の武装反革命への転化』なる恣意的主張よりは、次の無党派活動家の素朴な慨嘆に味方する。「やれやれ、昨日の革命的左翼が、数日で『反革命』になるとは。また、党派は気まぐれだから、そのうちまたかわるさ。」をさらに、実体化した彼らの無党派性・大衆への活解としてあるだろう。

われわれは、この中間主義、解党主義、現実の階級闘争の根本問題に例ら答えていないばかりか、日和見主義の体系化、社民への転落を許す結果としてあることを総括し、京学連の革命的再編をなすべく、書記局での論等の提起と、われわれの党派性を実体化し、京学連政治＝動員政治を打破するためにも、強固な部隊を形成し、さらに党建設を担い得る革命家＝共産主義者を組織できる戦線として新たな建設に着手し、着々と、整備し、次の飛躍を準備しつつある。

とりわけ、5―15首都清水谷での蜂起、戦争派の集会に、部隊を組織し、その成果で北態本を闘い、さらに沖縄現地への進撃をも闘い抜く決意で、戦線の再編集と沖縄闘争の更なる永続化＝派兵実力阻止闘争へ向けて、準備している。

さらにそれを、14日、第二次洛北戦線結成大会として、われわれの政治路線を明らかにし、派兵阻止、自衛隊解体への映画、講演により、沖縄闘争を担う部隊として打ち固め6・15、23を最先頭で闘い抜く、意志統一を強固にかちとるであろう。

赤ヘル大衆戦線の党的再編の先兵として
洛北戦線を打ち鍛えよ
レーニン研の無党派浮動性と闘い抜き
反帝戦線全国委洛北戦線支部